

吉谷トコ遺跡

1994. 3
財団法人 米子市教育文化事業団



例　　言

- 1 本書は、平成5年度において財団法人米子市教育文化事業団が実施した吉谷トコ遺跡発掘調査にかかる報告書である。
- 2 調査の組織は下記の通りである。
調査委託　中国電力株式会社　鳥取支店
調査主体　米子市教育文化事業団（理事長　森　田　隆　朝）
調査担当　藤　原　裕　子（米子市教育文化事業団調査員）
- 3 調査に当たって次の方々の指導・協力を得た。
調査協力　下高瑞成（米子市教育委員会教育文化課主事）
小泉千絵（米子市教育文化事業団調査員）・福嶋昌子（同臨時職員）
植佐知子（同臨時職員）
- 4 出土遺物はすべて米子市教育委員会で保管している。
- 5 本書の編集および執筆、図面の作成等は米子市教育文化事業団がこれを行った。

目　　次

例　　言	
目　　次	
I　　調査に至る経緯	4
II　周辺の歴史的環境	4
III　調査の概要	9
1　堅穴住居跡	9
2　掘立柱建物跡	22
3　溝　状　遺　構	26
4　土　　壙	26
5　そ　の　他	32
IV　小　結	32
〈付　編〉	
放射性炭素年代測定について	35
古環境研究所	



第1図 烏取県全体図



第2図 調査位置図 (1:50,000)

I 調査に至る経緯

吉谷トコ遺跡は中国電力株式会社吉谷変電所新設工事に伴う事前調査で発見され、米子市吉谷字トコ364番地ほかに所在する。

平成4年度中国電力株式会社より、米子市吉谷字364番地ほかにおける埋蔵文化財の有無の照会が米子市教育委員会にあった。同年度米子市教育委員会によって現地試掘調査の結果、開発予定地全域において遺跡の存在を確認した。

米子市教育委員会と中国電力株式会社の協議の結果、本調査の実施を決定し、中国電力株式会社より発掘調査の委託を受け、財団法人米子市教育文化事業団が平成5年5月9日から平成5年7月31日まで現地調査をおこなった。

II 周辺の歴史的環境

吉谷トコ遺跡は、米子市吉谷字トコ364番地ほかに所在する。ここは米子市の市街地から南へ4kmのところで、西伯町とは隣接する位置にある。

縄文時代早期の遺跡として、岸本町林ヶ原遺跡、溝口町長山馬籠遺跡など押型文土器を出土する遺跡が知られている。

縄文時代前期の遺跡は米子市日久美遺跡から貝殻条痕文土器、爪形文土器が出土している。

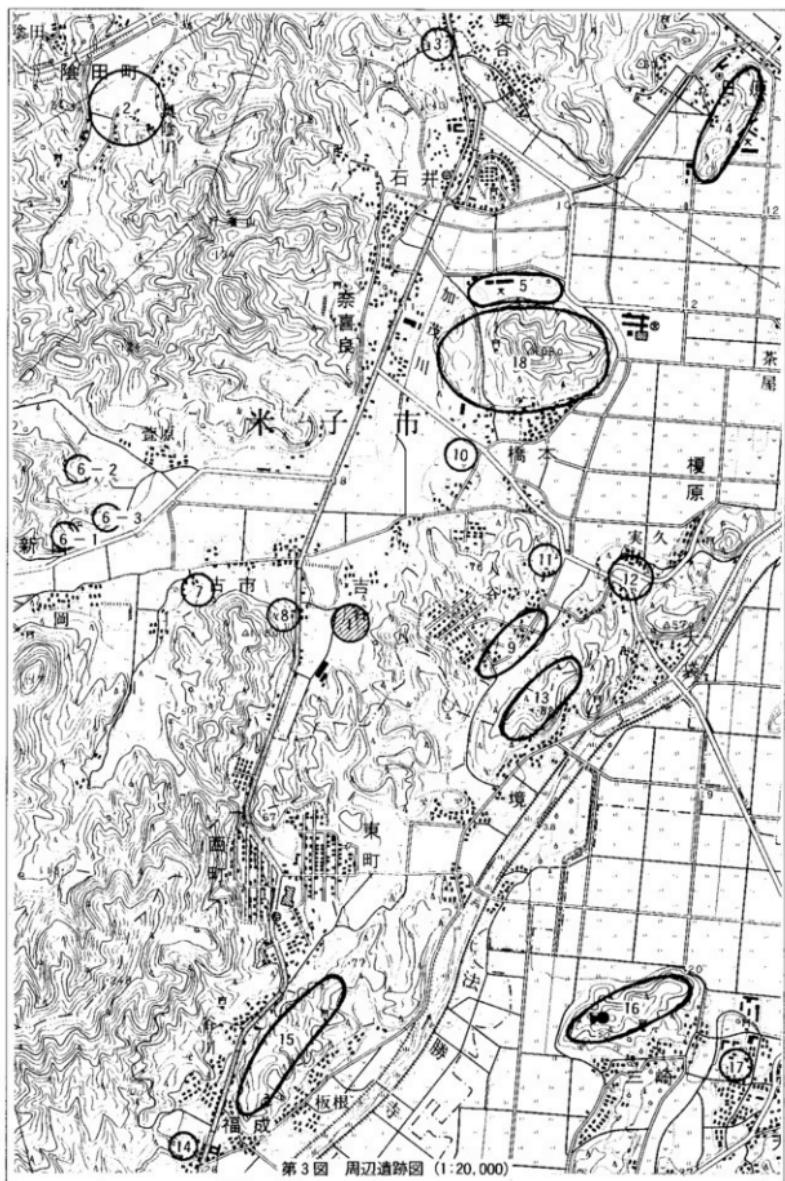
縄文時代中期の遺跡は今のところ明確ではなく、後期の遺跡としては米子市青木遺跡、東宗像遺跡、会見町越敷山遺跡群などが知られる。

縄文時代晚期になると、岸本町久古第3遺跡などがあり、西伯町でも遺跡は明らかではないが、水田の中から晚期の刻目凸帶文土器が採集されている。

弥生時代になると稻作農業が始まると時期で、米子市日久美遺跡において低湿地水田と微高地に営む集落を形成している。また会見町諸木遺跡では台地上に直径80mを超えるV字状環濠が掘られており、環濠集落と考えられる。中期になると米子市青木遺跡・日久美遺跡・西伯町マケン堀遺跡・馬場散布地・北福王寺遺跡など台地上山間部へと拡大する。前期末に諸木遺跡で見られた環濠は宮尾遺跡で見られる。

後期になると中期から継続する遺跡のほかに、新しく営まれる遺跡が増える。米子市奈喜良遺跡(5)・新山山田遺跡(6-1)・研石山遺跡(6-2)・吉谷上ノ原山遺跡(8)でもこの頃から集落が営まれ、古墳時代に継続される。その他米子市陰田遺跡の集落(2)・西伯町北福王寺遺跡などは短期間営まれる低丘陵地集落である。他に奥谷遺跡(3)では堅穴住居跡が確認されている。

弥生時代において、方形周溝墓や方形台状墓など相当の規模を有する墳墓が広範囲に営まれており、後期から終末期には人規模な墳丘をもつ有力な首長墓が各地に出現する。また米子市青木遺跡の方形周溝墓群は古墳時代前期に限って確認されており、山陰地方にお



第3図 周辺遺跡図 (1:20,000)

ける方形周溝墓の出現は、他地方に比べてその消長は特徴的である。

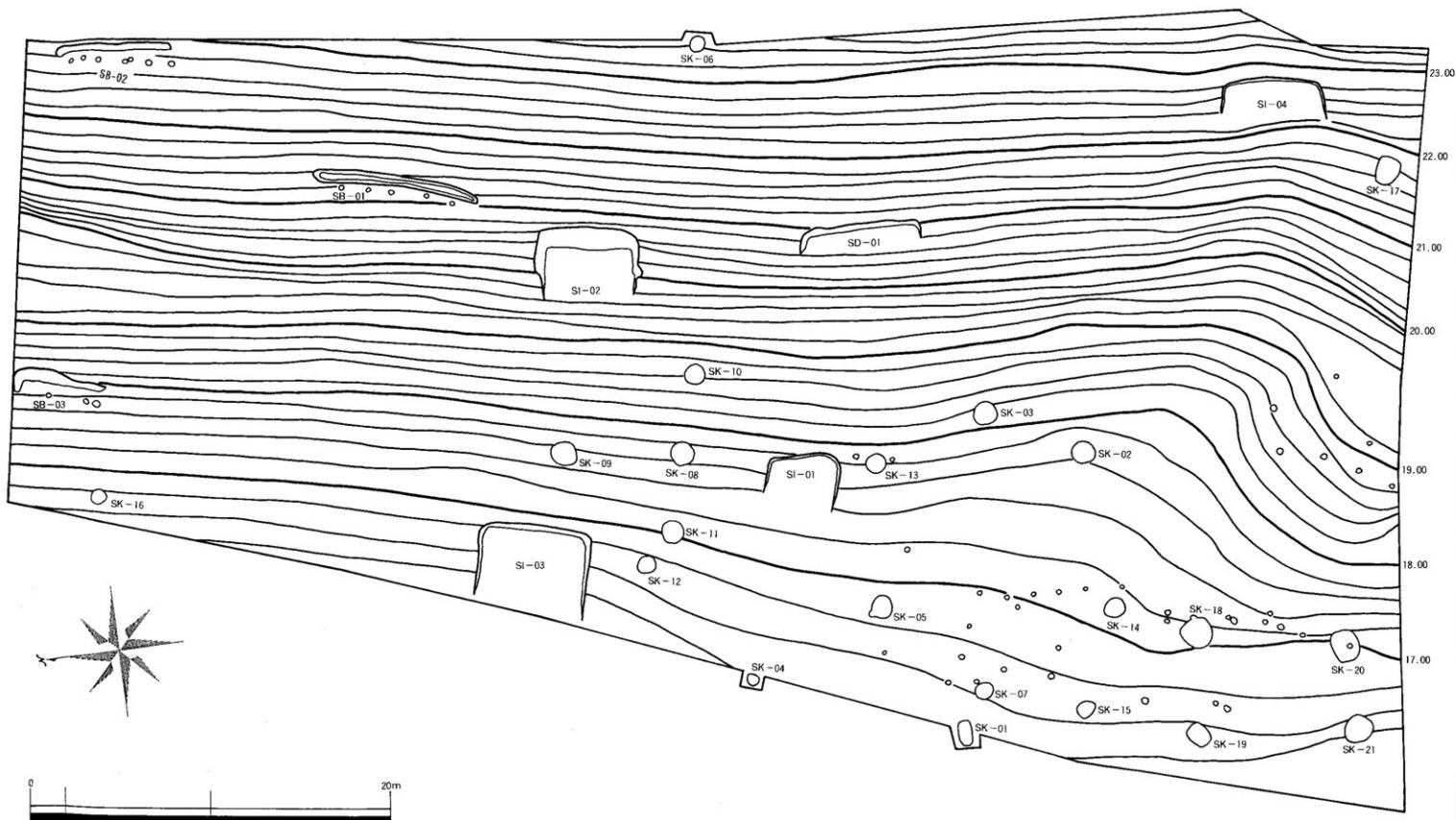
古墳時代前期の古墳としては、墳丘多葬例として注目されている日原6号墳（4）が知られ、これは1辺20mの方墳で台状墓的な様相が強い。全長23mの小型前方後方墳の会見町普段寺1号墳があげられる。ここからは舶載三角縁唐草文蒂二神二獸鏡、碧玉製管玉、鉄剣が出土している。この時代の集落は弥生時代から続いて営まれており、大谷遺跡（12）でも前期の住居跡が発見されている。

古墳時代中期は前方後円墳がもっとも巨大化する時期であり、会見町三崎殿山古墳（16）は全長110mの前方後円墳で西伯耆最大規模を誇る古墳である。その他にも40m～50mの前方後円墳が築造される時期である。また陰田41号墳（2）では少女を埋葬した箱式石棺を主体部としていた。その他米子市新山山田古墳群（6～3）では径6～11mと比較的小規模な円墳を確認している。この時代の集落はほとんど確認されてなく、今回の調査地である吉谷トコ遺跡（1）がこの時代の集落跡と考えられることからも、今後この時代の集落についても次第に明らかになっていくであろう。

後期になると小型の前方後円墳や大型の円墳のほかに、米子市陰田古墳群（2）・石州府古墳群・西伯町マケン堀古墳群など群集墳が盛んに造られるようになる。大規模な古墳としては境古墳群（13）・福成古墳群（15）などがしられる。一方出雲地方の影響を受けて6世紀後葉に横穴墓の築造が始まり、新山岡横穴墓群（7）・陰田遺跡群（2）がしられ、後者においては小横穴を含めて50基の横穴墓が確認されている。後期の集落として吉谷遺跡（10）のように丘陵緩斜面に営まれるようになる。

No	遺跡名	所在地	種別	概要
1	吉谷トコ遺跡	米子市吉谷	集落跡	
2	陰田遺跡群	米子市陰田		
3	奥谷遺跡	米子市奥谷		
4	日原古墳群	米子市日原		
5	奈喜良遺跡	米子市奈喜良	集落跡	堅穴住居跡
6	新山・山田古墳群	米子市新山	古墳群・集落跡	
7	岡古墳群	米子市古市		
8	吉谷上ノ原山遺跡	米子市吉谷		
9	榎原瓦窯跡	米子市榎原		
10	吉谷遺跡	米子市吉谷		
11	榎原第1遺跡	米子市榎原		
12	大谷遺跡	米子市大袋		
13	境古墳群	西伯町境	古墳群	
14	清水谷遺跡	西伯町		
15	福成古墳群	西伯町福成	古墳群	丹塗り人骨
16	三崎殿山古墳	会見町	古墳	前方後円墳
17	宮尾遺跡	会見町	環濠	
18	橋本城跡	米子市橋本	中世館	

周辺遺跡一覧表



第4図 調査地全体図 (1:200)

III 調査の概要

調査地はクロボクが堆積していたため、表土から約20cm～100cmを重機によって除去し、ほぼ地山直上まで検出した後、人力による調査を行った。当初一齊に全面を掘り下げる予定であったが排土を搬出できなくなったため、南側3分の1を排土置場に残し調査を行い、その後中央部3分の1に排土を移動して残りを調査する方法をとった。

調査の結果、堅穴住居跡4棟・掘立柱建物跡3棟・溝状遺構・貯蔵穴・落し穴等を検出した。

1 堅穴住居跡 (SI)

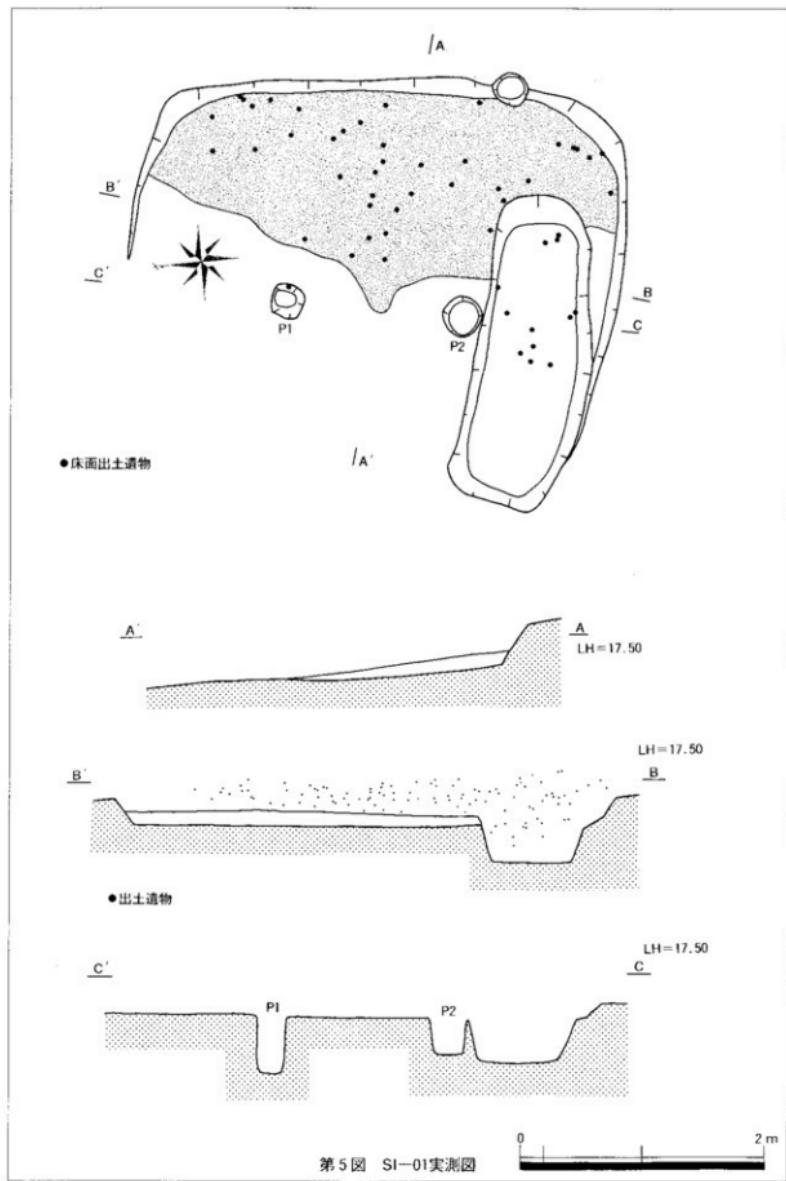
全部で4棟検出したが、斜面を削平して建てているため、すべての住居の谷側部分の壁は確認出来なかった。当初、それぞれが重なりあうことなく独立して建てられていることから、同時期に営まれた集落跡であろうと思われたが、調査の結果4世紀末から5世紀にかけて営まれていた集落跡とみられる。

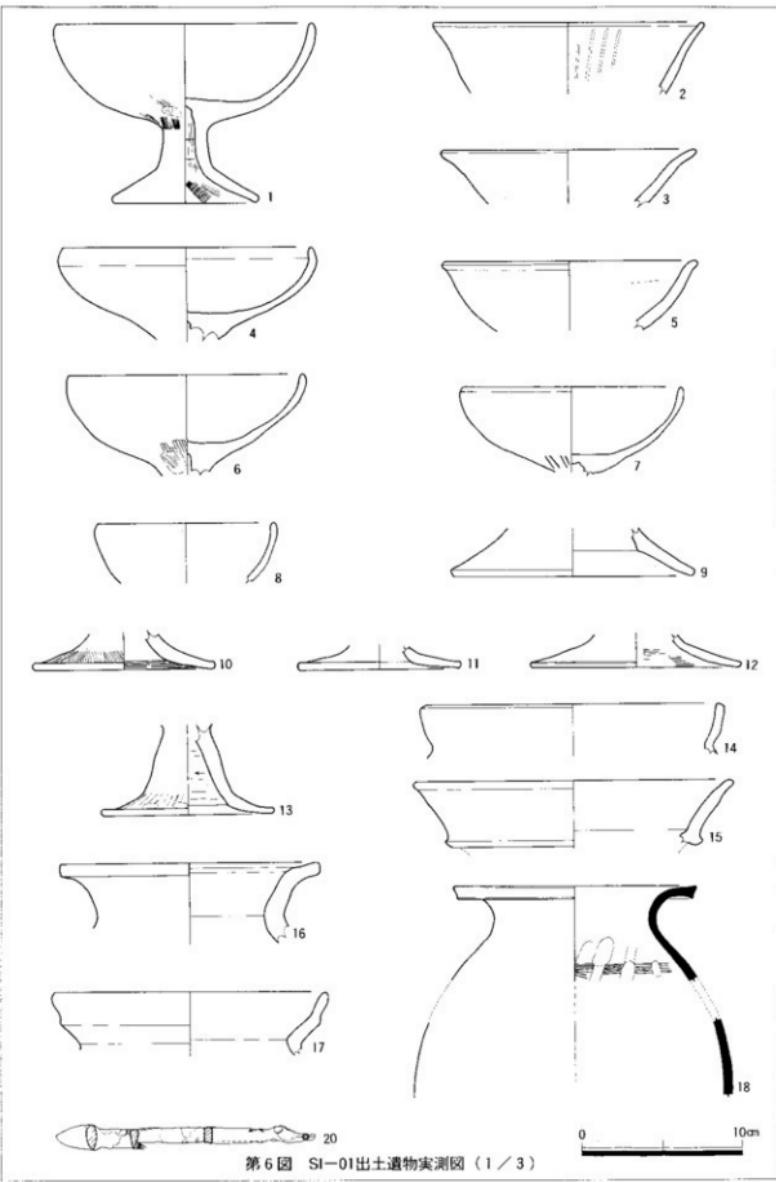
SI-01 (第5図) 調査地中央のやや南西に位置する。平面形は方形で、南北長4.05m、残存東西長3.4m、最大残存壁高22cmを測り、床面積推定13.26m²以上と思われる。床面で柱穴2個を検出し、各柱穴プランは北側P1(径50cm×55cm—約47cm)、南側P2(径60cm—30cm)で、柱間距離は1.5mを測る。その他床面南端において、東西2.55m、南北0.95m、深さ21～31cmの掘り込みを検出した。南側壁に沿うように掘り込まれていることや、中から甕の口縁が多数出土していることから、この住居に伴うもので、貯蔵穴として使っていたのではないかと考えられる。

またこの住居は貼床をしており、検出床面の約4分の3にわたって、厚さ10cm程度の貼床が残っていた。この貼床を取り除いたところ、高坏の坏部分(Na6)を検出し、その他はほぼ東側中央に径27.4×25.2cm、深さ17cmのわずかな掘り込みがあり、中から高坏の坏部分(Na7)を検出した。床の下に何故このようなことをしていたのか判らないが、建物を建てる際何等かの儀式を行ったのではないだろうか。

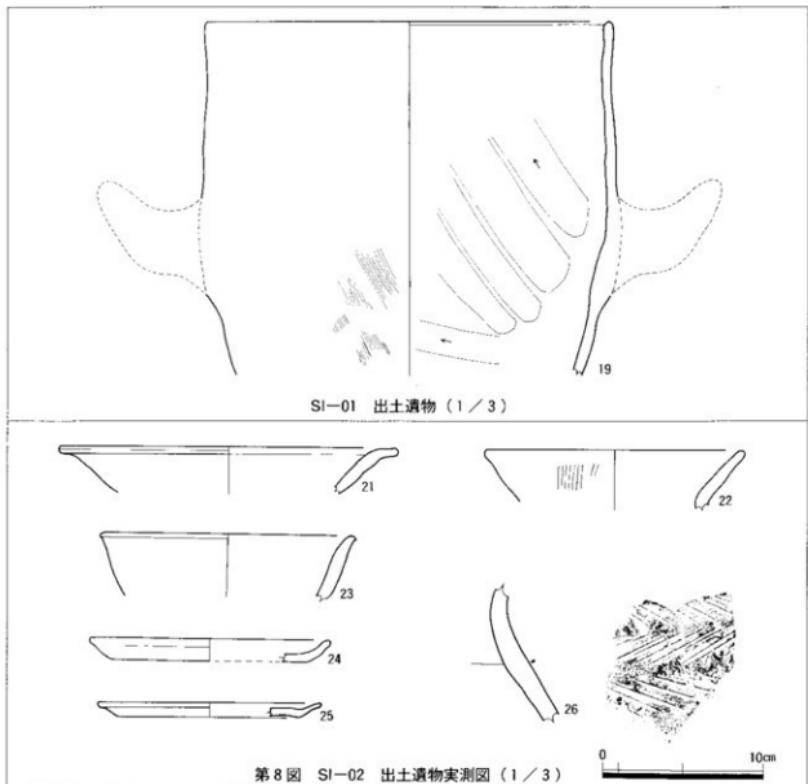
出土遺物 (第6図) 実測可能遺物として高坏完形1(Na1)、高坏坏部7(Na2・3・4・5・6・7・8)、高坏脚部5(Na9・10・11・12・13)、甕口縁4(Na14・15・16・17)、瓶1(Na19)、須恵器壺1(Na18)、鉄鎌1(Na20)を検出した。

高坏はほとんどが坏部と脚部が離れて出土しており、非実測も含めると概算で坏部17個体、脚部11個体分を検出したが、坏部と脚部を符合することはできなかった。坏部はいづれも丸みのある椀状のものであるが、Na2・3・5の坏端部はやや外側に開くものである。甕は約50個体分を検出している。うち実測可能なものは4個体でいずれも口縁部分で、Na15・17はわずかに稜が残る。時期は古墳時代中期後半と思われる。





第6図 SI-01出土遺物実測図 (1 / 3)



第8図 SI-02 出土遺物実測図 (1 / 3)

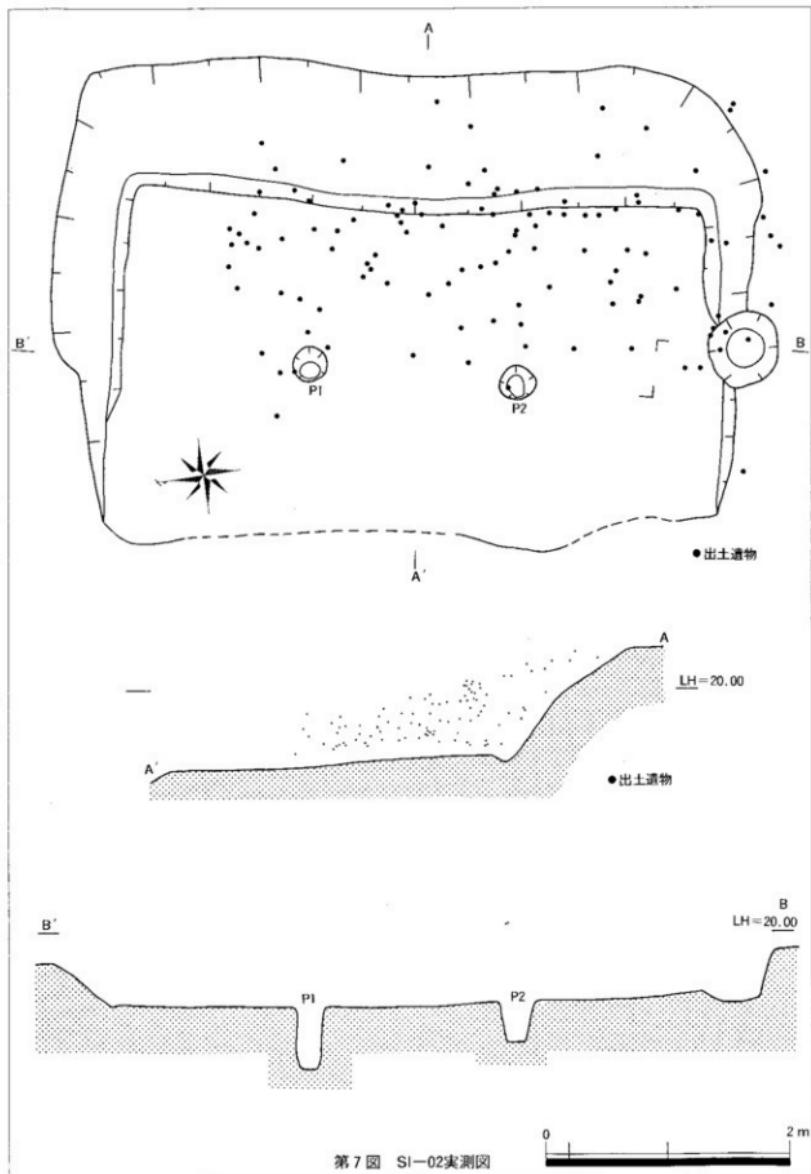
SI-02 (第7図) SI-01の北東約12mに位置する。平面形は方形で、南北長5.7m、残存東西長3.9m、最大残存壁高90cmを測り、床面積約12.74m²が残る。壁下には幅15cm、深さ2~6cmの溝を巡らす。床面で柱穴2個を検出し、各柱穴プランは北側P1(径28cm~50cm)、南側P2(径30cm~33cm)で、柱間距離は1.7mを測る。この住居でも貼床をしており、検出床面のはば全域にわたって10cmの床が貼り付けてあった。

またこの住居の東側壁中央部に径63×57cm、残存最大深さ38cmの穴を検出している。住居の周囲に他の遺構はなく、この住居に住うもの可能性はあるが明確ではない。

出土遺物 (第8図) 実測可能なものは高杯環部1 (No.21)、甕口縁2 (No.22・23)、中世土師器皿2 (No.24・25)、壺1 (No.26) を検出した。

甕を中心にかなりの個体数があると思われるが、いずれも小片であるため、実測できたのは6個体にとどまった。うちNo.23・24・25は上部からの流れ込みと思われる。

古墳時代前期後半~中期と考えられる。



第7図 SI-02実測図

SI-03（第9図） SI-01のはば北側約10mに位置する。平面形は方形で、南北長6.1m、残存東西長約5.0m、残存北壁3.4m、残存南壁4.6m、最大残存壁高53cmを測り、床面積約26.4m²が残る。壁下には幅13cm、深さ6cmの溝を巡らす。床面で柱穴18個を検出し、各柱穴プランはP1（径65×78cm—約65cm）、P2（径50×55cm—27cm）、P3（径31cm—34cm）、P4（径46×50cm—55cm）、P5（径45×47cm—15cm）、P6（径42×44cm—68cm）、P7（径43×46cm—11cm）、P8（径27×30cm—38cm）、P9（径32×37cm—44cm）、P10（径18×21cm—22cm）、P11（径20cm—8cm）、P12（径35×37cm—15cm）、P13（径52×56cm—8cm）、P14（径20cm—17cm）、P15（径28cm—34cm）、P16（径32×36cm—30cm）、P17（径23cm—34cm）、P18（径18×30cm—42cm）を測る。このうちP2は底部をさらに10cm程度掘り下げてあった。また土器の入ったピットがあったが、P1からは高杯坏部（No34・35・37）、長頸壺（No73）、P2から高杯坏部（No37）、P5から高杯脚部（No49）を検出した。貯蔵穴というよりは儀式等何か祭的の意味を持つものではないだろうか。

本住居の主柱は規模からして4本で構成していたのではないかと考えたが、位置的にみてP4・P6の2穴しかつながらず、本住居も他の住居と同様2本柱の建物であったと思われる。ただ他にもピットを多数検出しているので、補助柱的なものが幾つかあったのではないかだろうか。

また床面で幾つかの溝を検出した。P12から東に向けて長さ95cm、幅23cm、深さ10cm（溝1）、北壁からP4に向けて長さ120cm、幅20cm、深さ約11cm（溝2）、東壁と平行して南端は消滅しているようだが、残存長さ340cm、幅20cm、最大深さ6cm（溝3）、この溝を切る形で、東壁中央から西に向って長さ105cm、幅約14~30cm、深さ10cm（溝4）と、東壁3分の1南側より西に向って長さ110cm、幅約25cm、深さ7cm（溝5）の溝をP1を挟むようにして検出した。

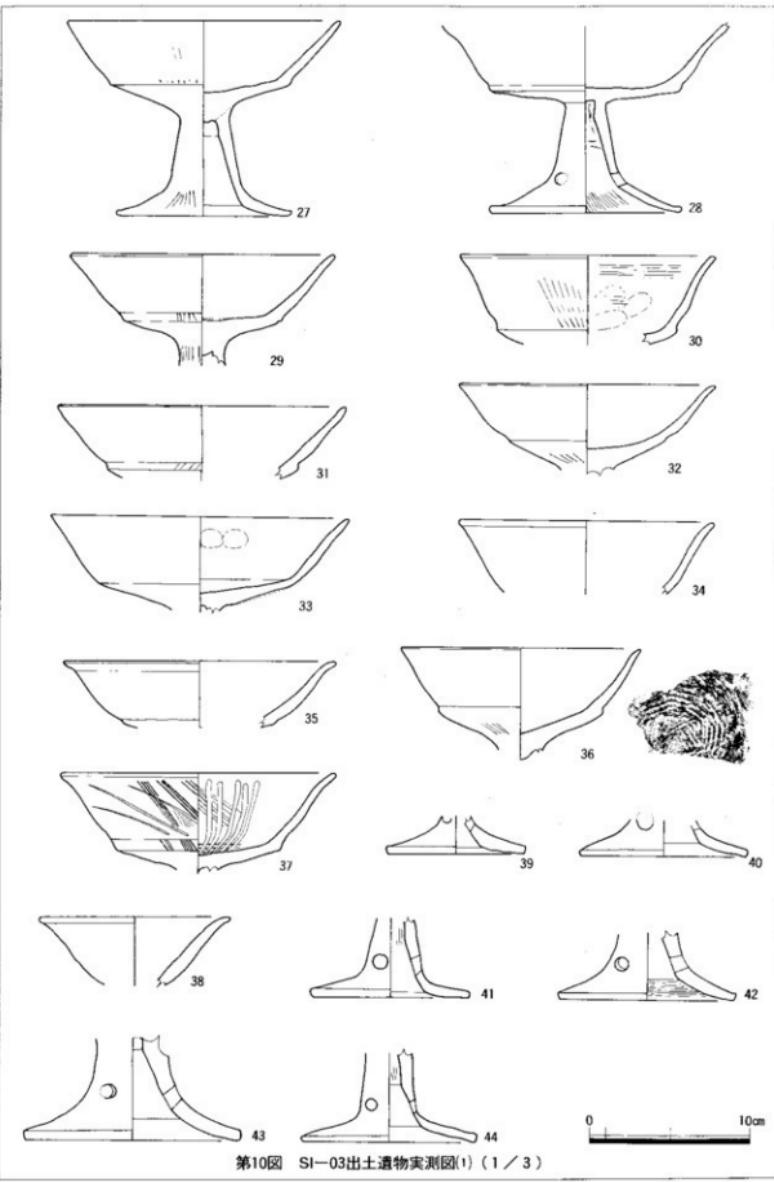
その他床面で焼土を2か所検出した。

出土遺物（第10・11・12図） 実測可能なものとして高杯完形2（No27・28）、高杯坏部10（No29~38）、高杯脚部11（No39~49）、甕20（No50~69）、壺3（No70・71・72）、長頸壺4（No73~76）、碗3（No77・78・79）、弥生底部（No80）を検出している。その他高杯坏部約40個体、高杯脚部約30個体、甕約190個体（小片が多いため重複している可能性もある）、弥生土器約10個体程度のものがみられたが、小破片のため実測はできなかった。

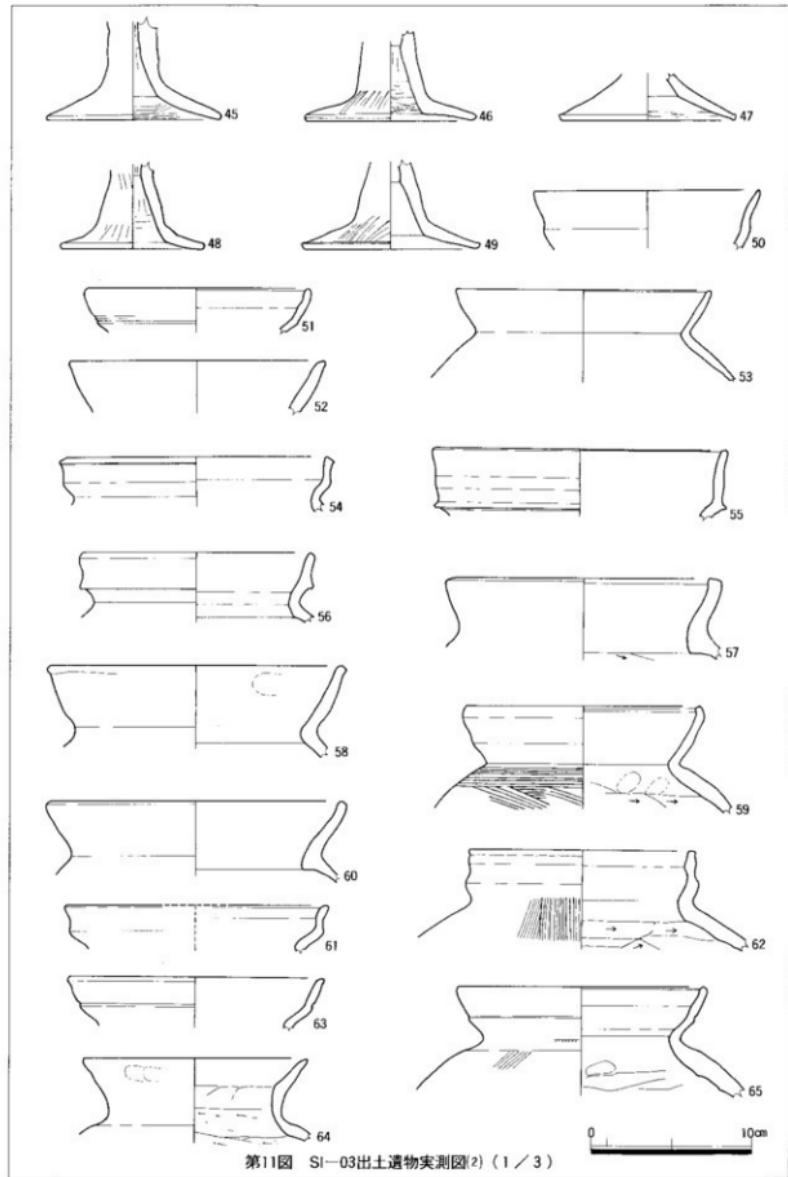
高杯坏部はやや大きめで、端部は外側に「ハ」の字に開き、棱を施してある。脚部には3方に透しが施してあるものが多い。時期は古墳時代前期後半～古墳時代中期前半と思われる。



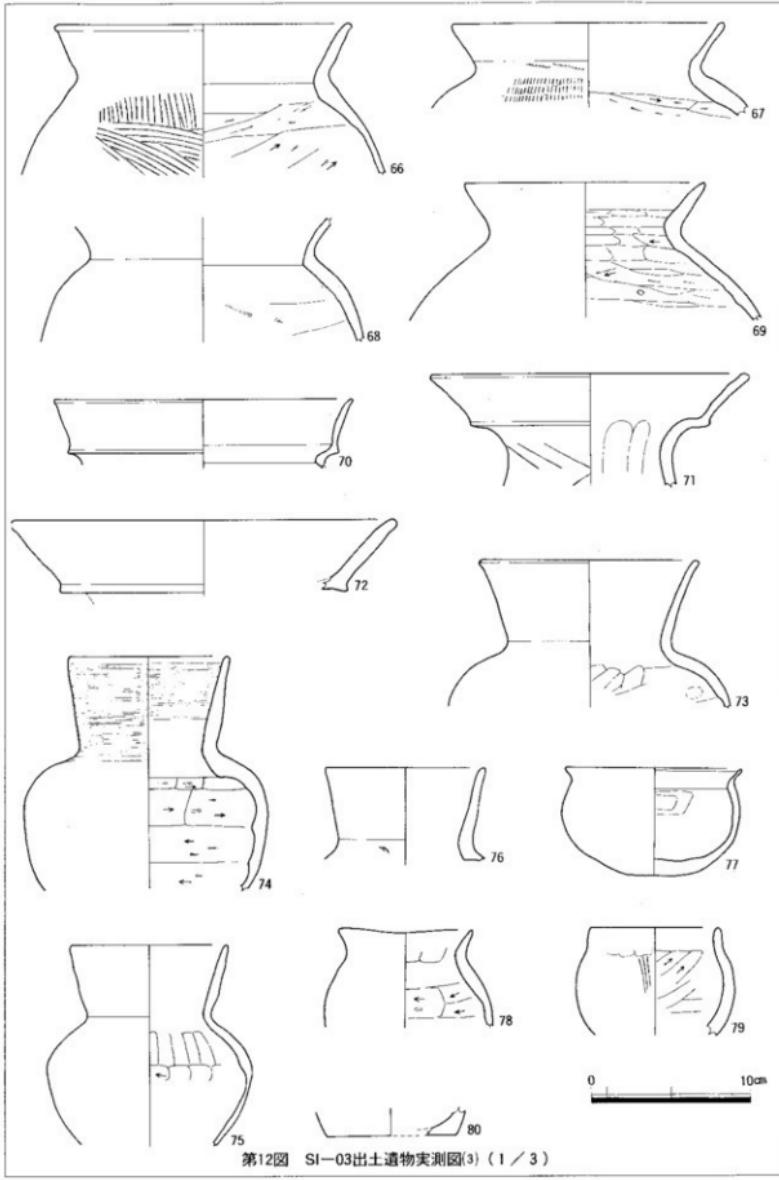
第9図 SI-03実測図



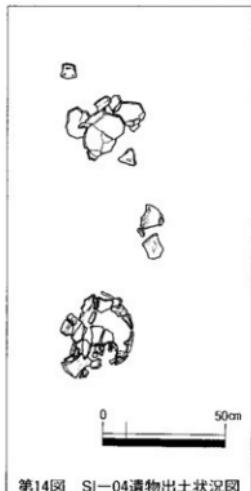
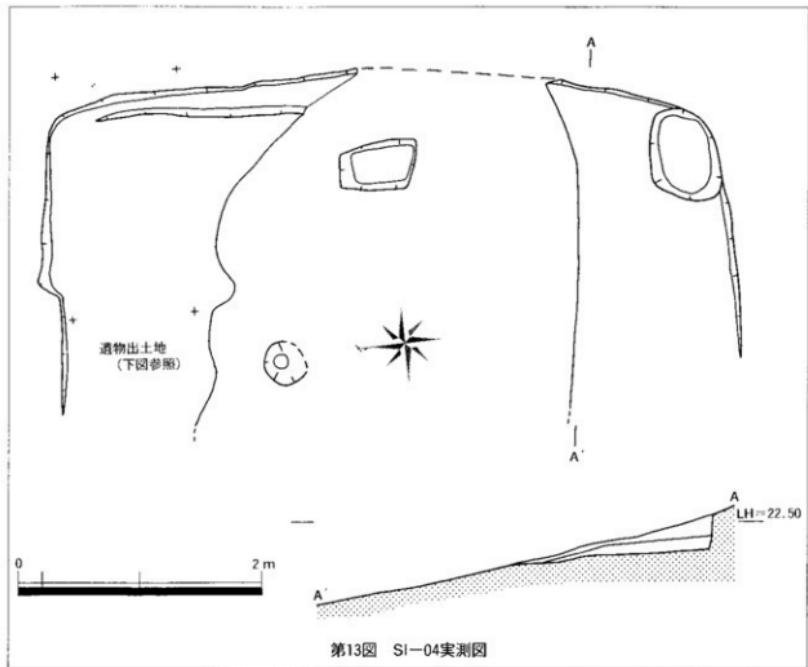
第10図 SI-03出土遺物実測図(1) (1 / 3)



第11図 SI-03出土遺物実測図(?) (1 / 3)

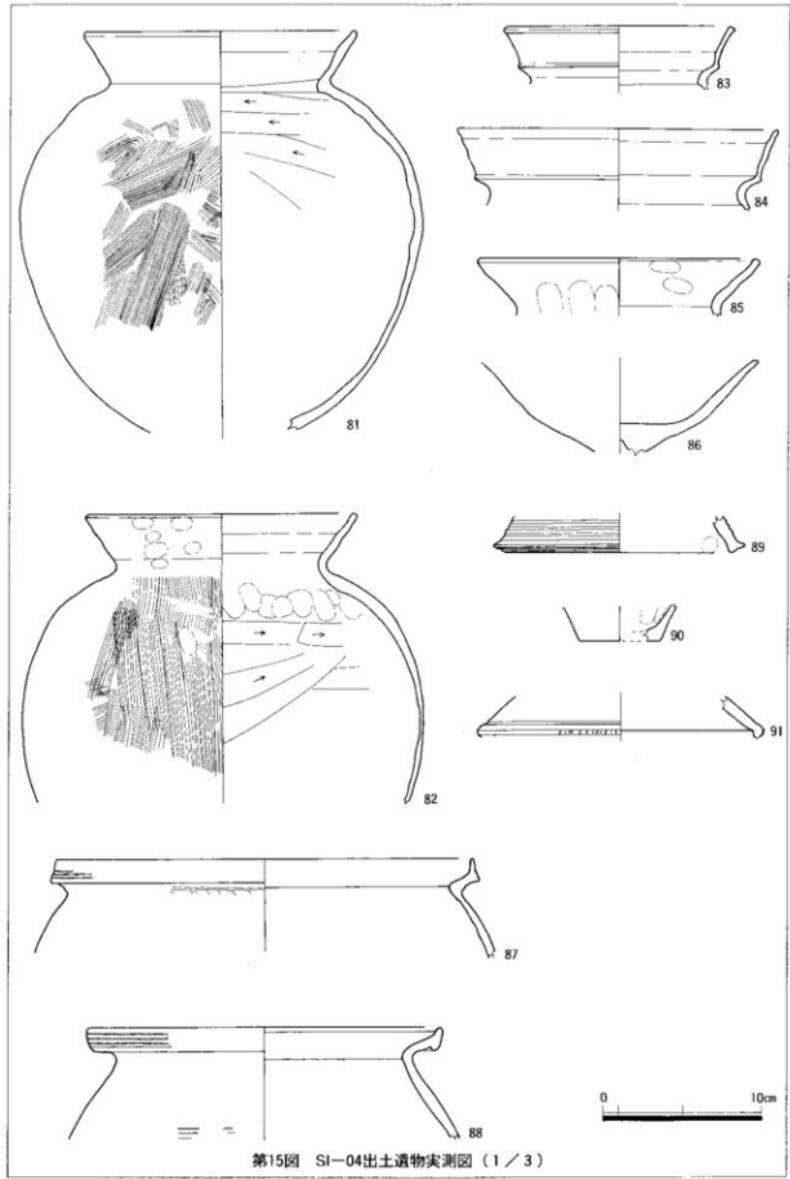


第12図 SI-03出土遺物実測図(3) (1 / 3)



SI-04（第13図） 調査地のほぼ南東隅、SI-01の南東約28mに位置する。中央部を東西に後世の溝によって幅約3m切られているが、平面形は方形で、南北長5.65m、残存東西長2.7m、最大残存壁高0.34mを測り、床面積約15.25m²が残る。壁下の一部には幅25cm、最大深さ16cmの溝が残る。柱穴は1穴のみ確認できたが、溝に切られていることからみて、おそらく2穴はあったと思われる。柱穴プランは径約35cm、深さ31cmが残っていた。

その他南東隅に長辺75cm、短辺55cm、深さ30cmの掘り込みを検出したが、中からは何も検出されなかった。また東側中央部溝の下方にあたる部分から長辺60cm、短辺41cm、残存深さ29cmの掘り込みを検出したが、弥生土器を検出していることからも、本住居のものではないと思われる。



第15図 SI-04出土遺物実測図 (1 / 3)

出土遺物（第15図） 壺5（№81～85）、高杯1（№86）、弥生壺2（№87・88）、器台1（№89）、弥生底部1（№90）、弥生高杯1（№91）を検出している。

高杯は口縁端部が外側に聞くもので若干稜が残る。壺は№81・82はほぼ完形であるが、他は口縁部である。№87～91は弥生時代のもので、後世の溝の中から出土していることから流れ込みの遺物と思われる。時期は古墳時代前期と思われる。

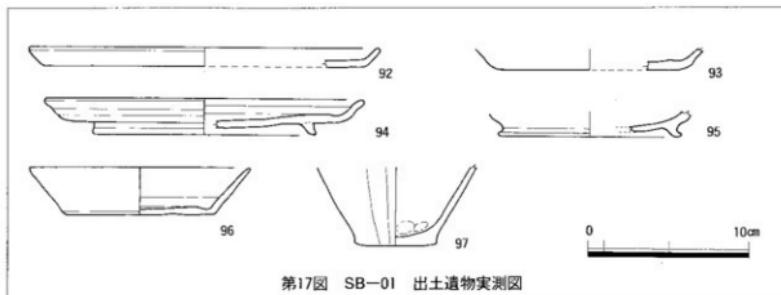
2 挖立柱建物跡（SB）

全部で3棟検出した。いずれも建物の山側に溝を施したもので、柱穴は山側のみで谷側のものは確認出来なかった。3棟のうち1棟（SB-03）は、かなり規模が小さいと思われ、他の建物とは違う用途で使われていたのではないだろうか。

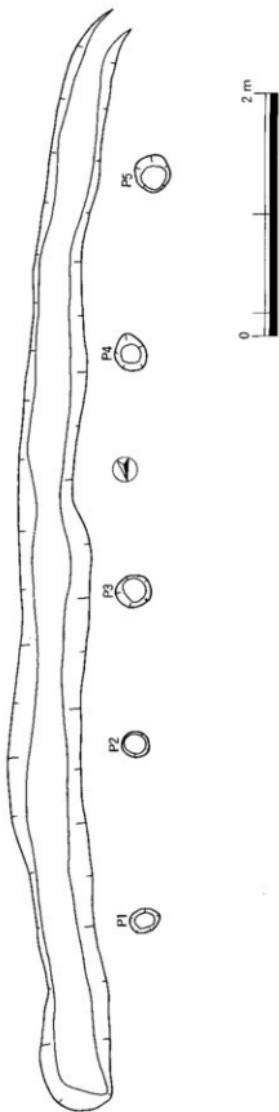
SB-01（第16図） SI-02の北東約4mに位置する。長軸N17°E方向を向き桁行4間（梁間は不明）、桁行長6.1mを測る建物である。山側には長さ9.1m、幅60cm、残存深さ16cmの溝を施す。柱穴は5個を数え、プランは北側からP1（径20×25cm-61cm）、P2（径23cm-62cm）、P3（径25×29cm-65cm）、P4（径25×29cm-62cm）、P5（径30cm-54cm）で、柱穴間距離はP1-P2（1.45m）、P2-P3（1.25m）、P3-P4（1.9m）、P4-P5（1.5m）を測る。

出土遺物（第17図） 盆2（№92・93）、高台付皿1（№94）、高台1（№95）、壺1（№96）、弥生上器1（№97）を検出した。

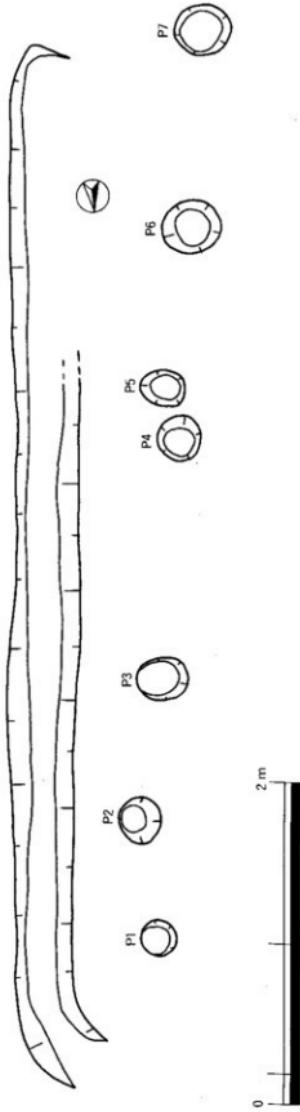
実測したもののうち弥生土器以外はすべて中世のものと思われるが、実測はできなかつたが弥生土器も数点検出されており、また出土状態から見ても中世土器がこの遺構に伴うものとは考えられない。このことから、この遺構は弥生時代後期のものと考える。



第17図 SB-01 出土遺物実測図



第16図 SB-01実測図



第18図 SB-02 全体平面図

SB-02 (第18図) SB-01の北東約10mに位置する。柱穴を全部で7個確認した。北側からP1とし、柱穴プランはP1(径20~58cm)、P2(径25×28cm~48cm)、P3(径25×32cm~39cm)、P4(径26cm~59cm)、P5(径21×28cm~72cm)、P6(径32cm~57cm)、P7(径30×32cm~65cm)で、柱穴間距離はP1-P2(75cm)、P2-P3(90cm)、P3-P4(145cm)、P4-P5(35cm)、P5-P6(100cm)、P6-P7(120cm)を測る。山側には長さ6.4m、幅42cm、残存深さ14cmの溝を施す。

このうち柱間距離・溝との位置関係からみて、P1・P3・P4・P6で建物を構成していたと考えられる。他の柱穴は別の建物の可能性も考えられるが、柱間距離が一定ではなく、直線的に並ばないことから、建物よりむしろ補助柱があったのではないかと考えられる。

この建物の長軸はN10.5°E方向を向き、桁行3間(梁間は不明)、桁行長4.4mを測る。柱間距離はP1-P3(160cm)、P3-P4(145cm)、P4-P6(135cm)であった。

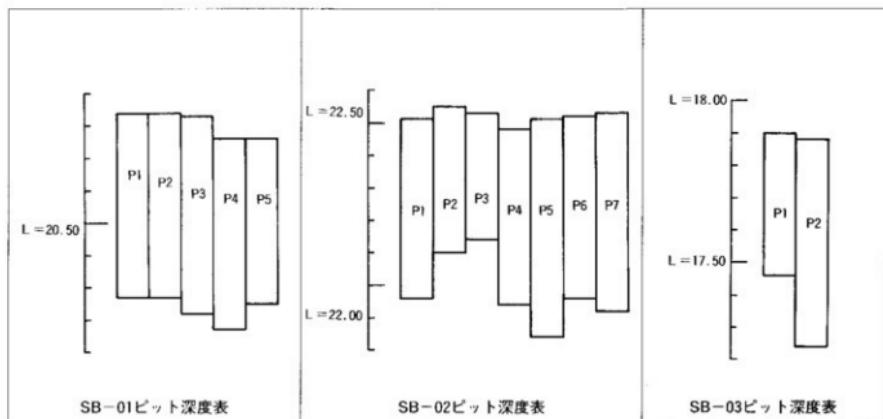
出土遺物 弥生時代の土器を検出したが、小片のため実測はできなかった。

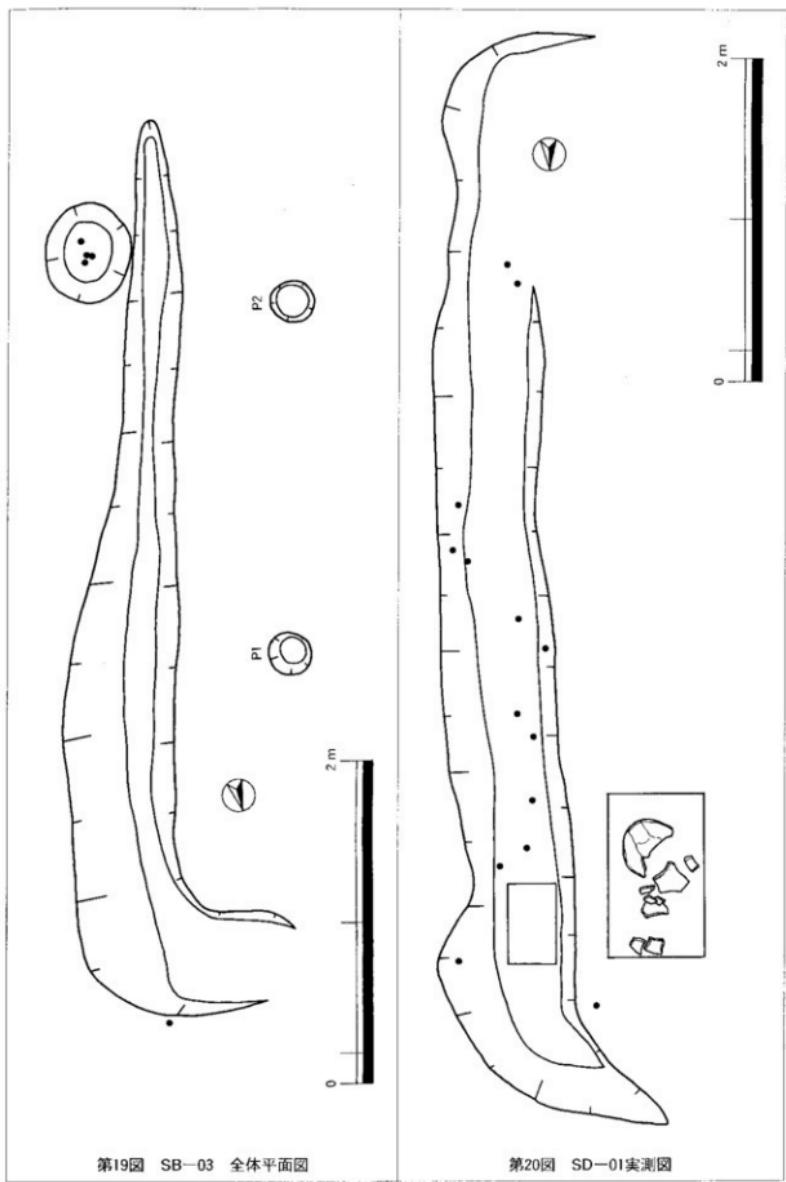
SB-03 (第19図) SB-01の北北西約18mに位置する。長軸N18°E方向を向き桁行1間(梁間は不明)、桁行長2.75mを測る建物である。山側には長さ5.55m、幅70cm、残存深さ41cmの溝が残る。柱穴は2個を数え、北側からP1とする。柱穴プランはP1(径25cm~46cm)、P2(径25cm~59cm)で、柱穴間距離は2.15mを測る。

SB-01・02が何のための建物であるかは判らないが、これらに比べても遙かに規模が小さいことから、本建物は少なくとも住居とは考えられない。

溝の南端肩部付近に径55×65cm、深さ34cmの掘り込みを検出したが、用途は不明である。

出土遺物 弥生土器小片を検出した。





第19図 SB-03 全体平面図

第20図 SD-01実測図

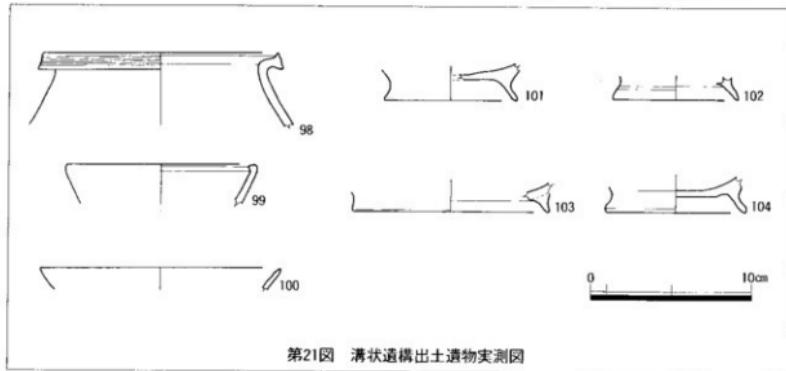
3 溝状遺構 (SD)

掘立柱建物跡にある溝と同じようなものであるが、柱穴等は確認されなかった。

SD-01 (第20図) SI-01の南東約12mに位置する。長さ6.7m、幅70cm、最大残存深さ39cmを測る。掘立柱建物跡などに見られる溝と同様、両端が谷側に向かってわずかに屈曲しており、何かの周囲に作られたものであると考えられるが、柱穴等その他の遺構を確認できず、用途は不明である。

出土遺物 (第21図) 弥生壺1 (No98)、壺2 (No99・100)、高台4 (No101～104) を検出した。

壺、高台は比較的新しく中世のものと思われる。しかし実測可能なものは少なかったが、弥生土器の数が占める割合が多くみられ、弥生時代後期の遺構ではないかと思われる。



第21図 溝状遺構出土遺物実測図

4 土壙 (SK) (第22・23・24図)

全部で21の土壙を検出した。斜面に造られていることから上部がかなり削られていると思われるものもあり、遺物の検出された土壙も少ないとから各土壙の種別を決めかねたが、土壙の径、深さ、遺物の有無などから、落し穴、貯蔵穴、その他の土壙に区別した。その結果落し穴10穴、貯蔵穴9穴、その他の土壙2穴であった。

落し穴 (SK-01・07・10・02・09・12・13・14・15・16)

底部中央にさらにピット状のものがあるものSK-01、ピット状のものは無いがほぼ垂直に掘られ、一定の深さがあることから落し穴としたものSK-07・10である。その他途中土層の変化で正確な深さは不明だが、落し穴と思われるものSK-02・09・12・13・14・15・16である。

出土遺物 いずれの落し穴からも遺物等はまったく検出されなかった。

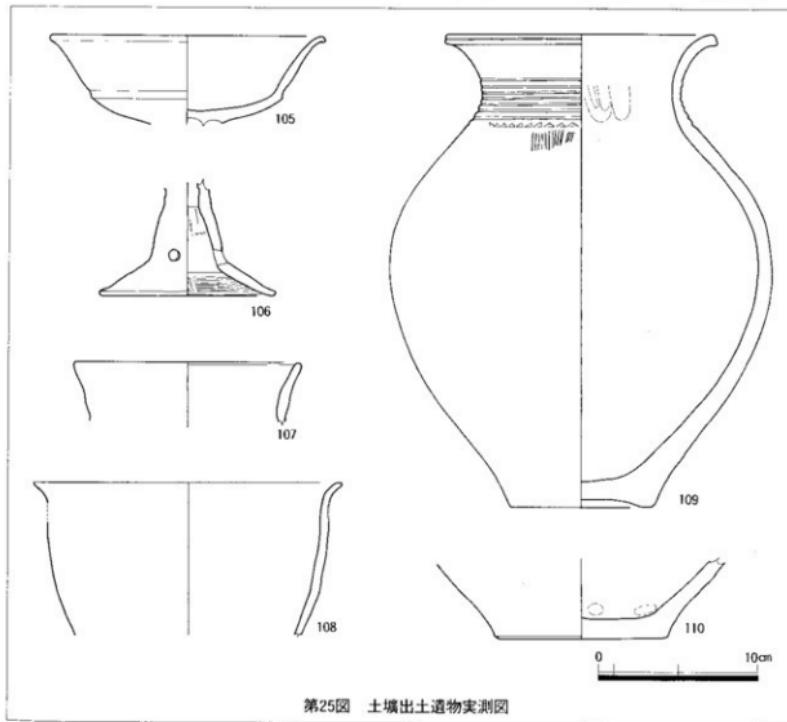
貯蔵穴 (SK-03・05・08・11・17・18・19・20・21)

SK-08を掘ったところ、深さ23cmと浅かったが中から壺と甕を検出した。いずれも弥生時代前期上器で壺の口縁部には7条の沈線と一角刺突文が施してある。甕は口縁部のみで端部の刻目も体部の模様も見られない。このことからSK-08を貯蔵穴と考え、その他の土壌で遺物も無く、浅いものであっても、SK-08と似た形態のものを貯蔵穴とすると、SK-03・05・11・21が考えられる。またSK-17・18・19・20は方形あるいはそれに近い形であるが、一部で上器を検出したものがあることから、これらも貯蔵穴と考える。

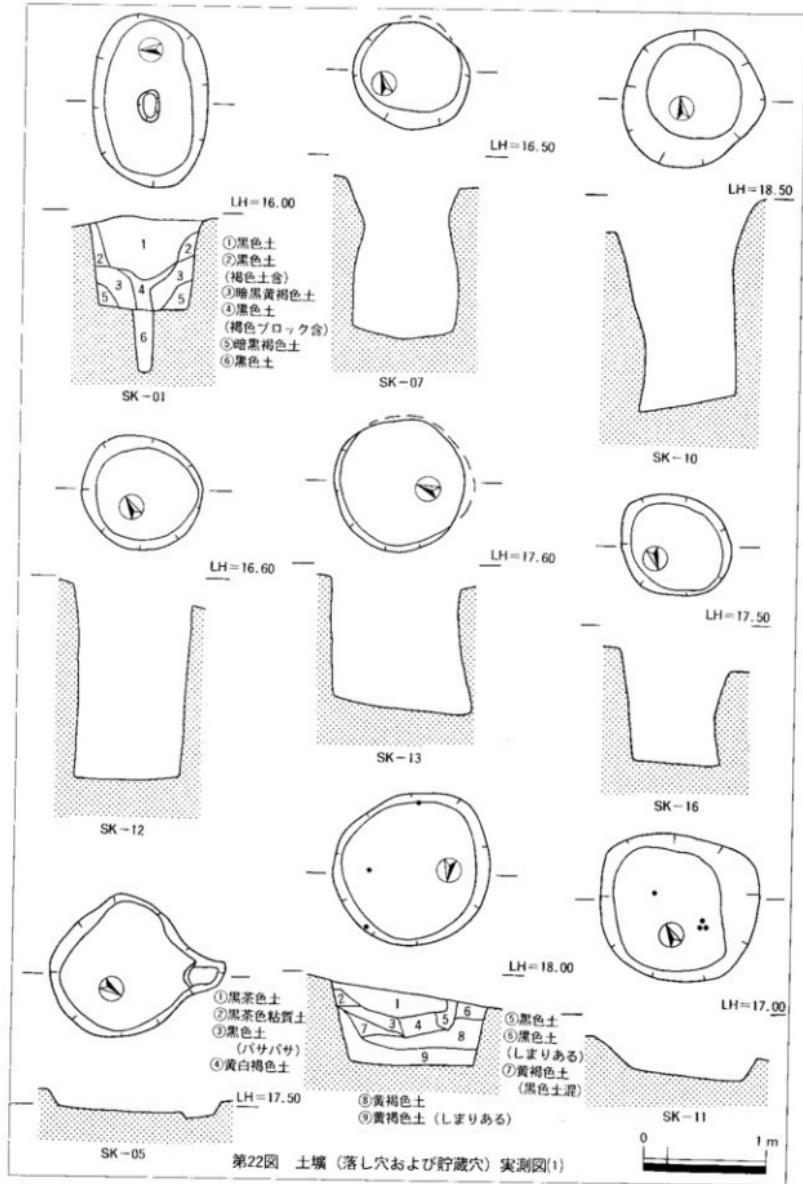
出土遺物 (第25図) 遺物が検出されたのは、SK-03・08・11・18・19であるが、SK-08の壺 (No.109)、甕 (No.108)、SK-18の壺底部 (No.110) 以外は小片のため実測はできなかった。しかしながらいずれも弥生時代前期のものであると思われる。

その他の土壌 (SK-04・06)

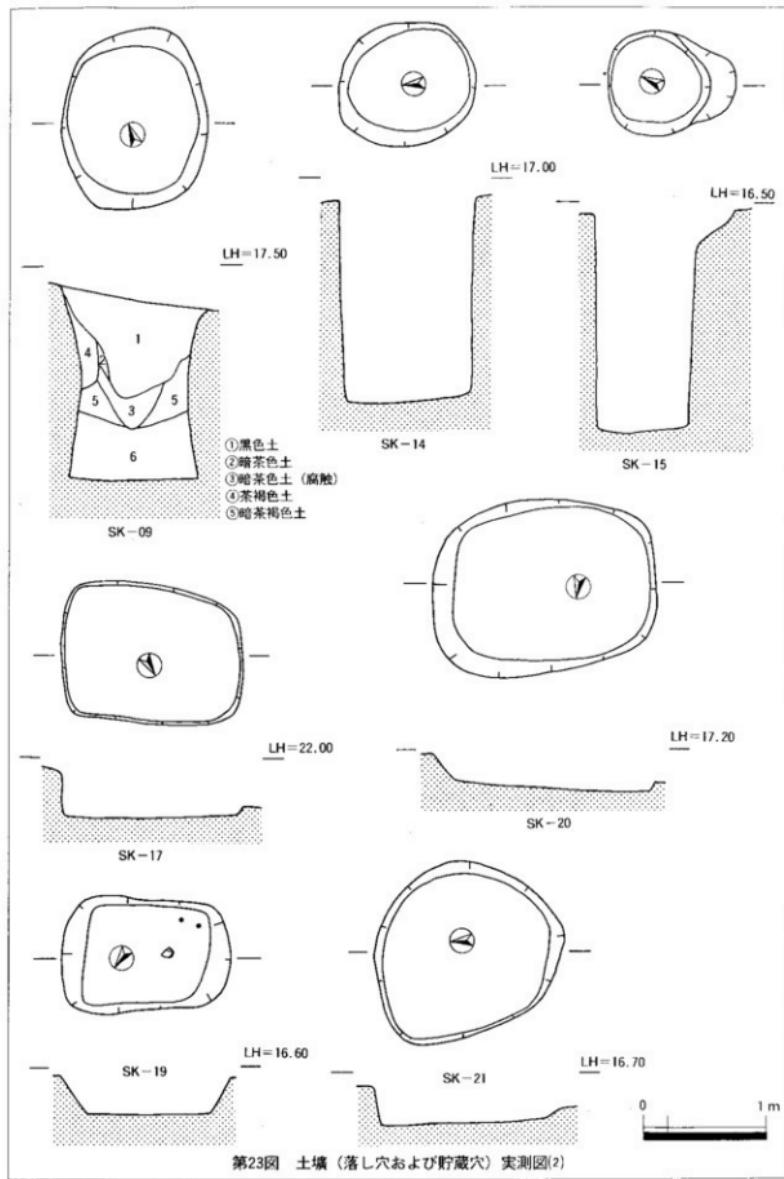
SK-04は規模から見て落し穴とも貯蔵穴とも考え難く、また遺物もないとため用途は不



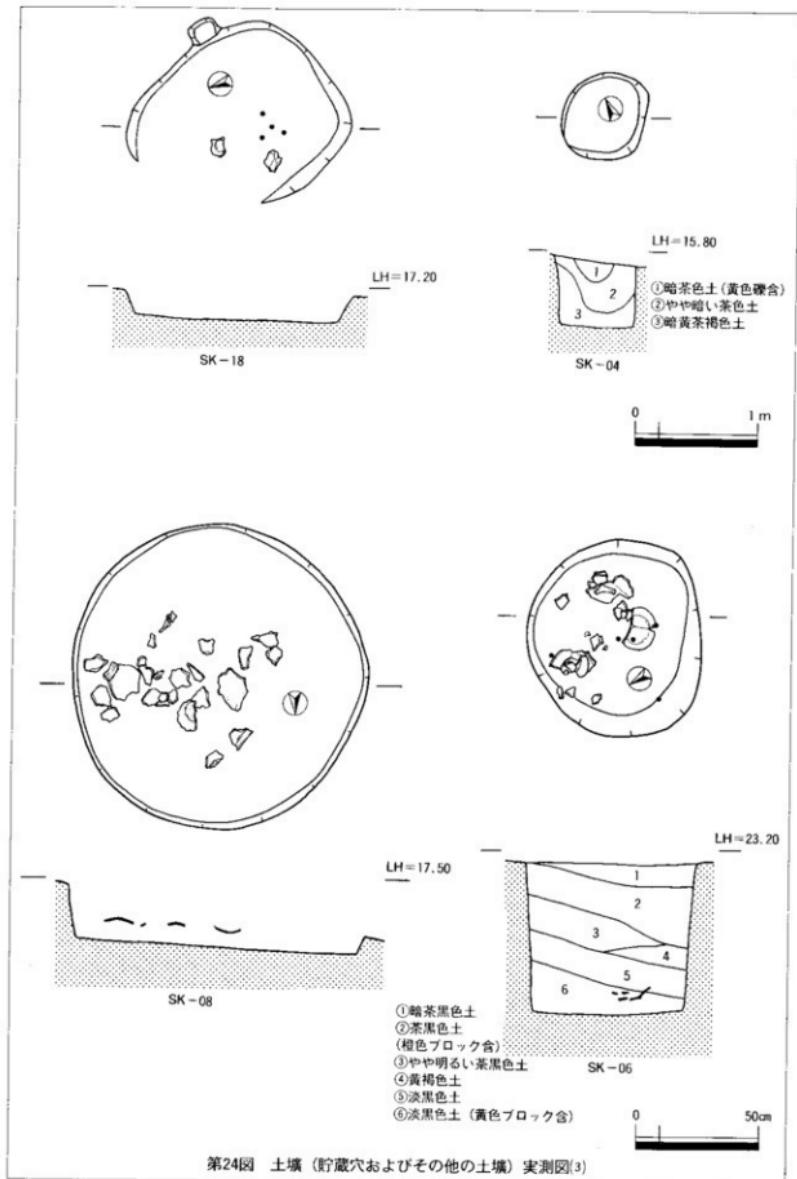
第25図 土壌出土遺物実測図



第22図 土壌(落し穴および貯蔵穴)実測図(1)



第23図 土壌（落し穴および貯蔵穴）実測図(2)



明である。

SK-06もSK-04と同規模のもので用途は不明である。しかし中から高坏と甕を検出していることから、祭祀関係の遺構とも考えられるが定かではない。

出土遺物（第25図） SK-06から高坏1（Na105・106）、甕（Na107）を検出した。

落し穴一覧表

	形態	規模
SK-01	椭円形	95×140cm－深75cm
		25-17cm－深50cm
SK-02	円形	130×124cm－深90?cm
SK-07	円形	径90×96cm－深126cm
SK-09	椭円形	径148×122cm－深185?cm
SK-10	円形	径118×114cm－深165cm
SK-12	円形	径94×100cm－深160?cm
SK-13	円形	径115×110cm－深105?cm
SK-14	円形	径112×102cm－深110?cm
SK-15	円形	径87cm－深110?cm
SK-16	円形	径89cm×82cm－深80?cm

貯藏穴一覧表

	形態	規模
SK-03	円形	径130cm－深65cm
SK-05	不整形	径144×118cm－深7cm
		30×35cm－深11cm
SK-08	円形	径122×127cm－深23cm
SK-11	隅丸方形	径130×122cm－深27cm
SK-17	長方形	一边149×116cm－深36cm
SK-18	隅丸方形?	一边140×推定170cm－深32cm
SK-19	隅丸長方形	一边141×92cm－深29cm
SK-20	隅丸長方形	一边183×145cm－深21cm
SK-21	不整形	径153cm－深31cm

その他の土壙

	形態	規模
SK-04	円形	径68×73cm－深58cm
SK-06	円形	径72×81cm－深69cm

5 その他

周辺出土遺物（第26図） 高坏（No111・112）、甕口縁（No113～115）、弥生高坏脚部（No116）、中世土師器皿（No117～122）、中世土師器坏（No123・124）、中世土師器高台（No125～131）、須恵器坏（No132）等遺構に伴わないが周辺からも遺物を数点検出した。中世の遺構は確認できなかったにもかかわらず、中世の土器が多数検出していることは、周辺に中世の遺構があることをうかがわせる。

トレーナー出土遺物（第27図） 試掘時に土師器壺口縁（No133・134）、弥生土器底部（No135）、弥生土器壺（No136）、古式土師器壺（No137）等を検出しているが、どの遺構に対応するものかは不明である。

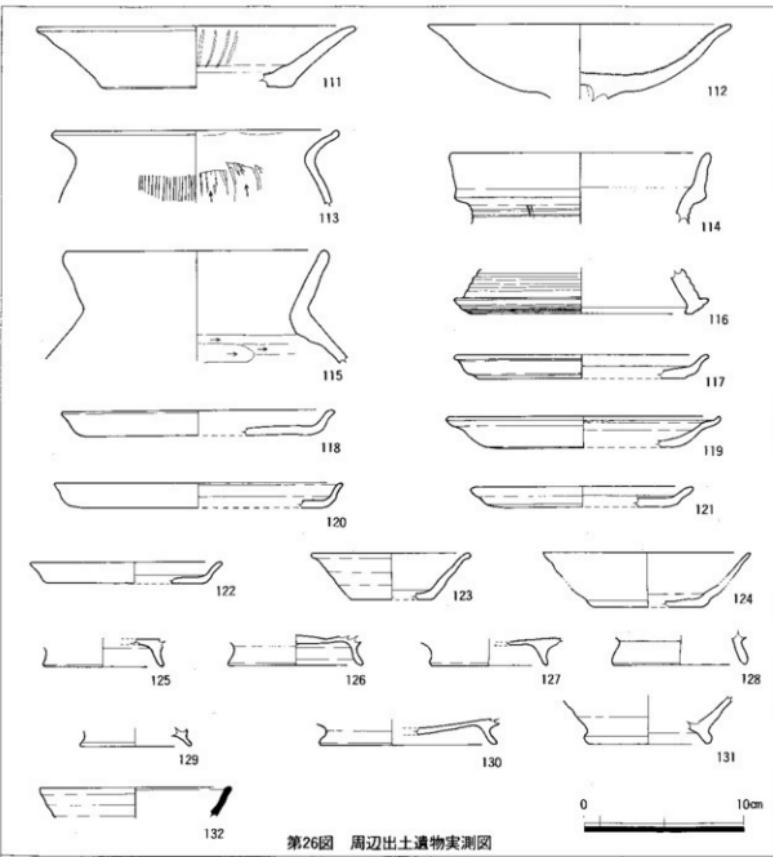
鉄塔部（第28図） 鉄塔を2棟建設するため、それぞれの鉄塔につき脚部（ $2 \times 2\text{ m}$ ）4ヶ所、計8ヶ所（ 32m^2 ）の調査を行った。当初ここには、古墳あるいは中世の山城跡があるのではないかと考えられていた。調査の結果、遺構の確認および遺物の検出はできなかった。

今回の調査では鉄塔の脚部分のみというわずかに限られた範囲に調査が止められたことで、今回の結果によってこの地に古墳および中世の山城があった可能性がなくなったわけではない。

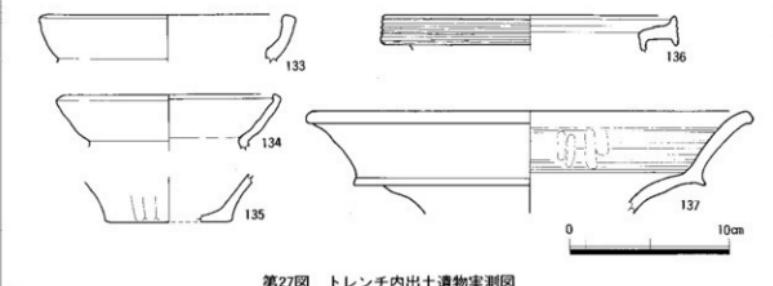


IV 小 結

調査の結果、本遺跡は弥生時代前期から古墳時代中期にかけて営まれた集落遺跡と思われる。



第26図 周辺出土遺物実測図



第27図 トレンチ内出土遺物実測図

弥生時代前期の建物は確認できなかったが、貯蔵穴を確認していることから見て、少なくとも今回の調査地周辺で生活が営まれていたと考えられる。その後中期に入り、溝を伴う掘立柱建物が造られる。今回確認した掘立柱跡物跡は3棟である。これらの建物が住居として生活の拠点となっていたのか、あるいは倉庫として使われていたのか、今回の調査ではその使われ方は明らかではない。しかしこのうちSB-03については規模からして住居としていたとは考え難い。いずれにしてもこの地あるいは周辺地域において生活が営まれていたということは否めない。

古墳時代になると、人々はこの地に堅穴住居を造り生活を営み始める。今回の調査で確認した古墳時代以降の遺構は堅穴住居跡4棟である。いずれも重なりあうことなく造られており、遺物から見るとSI-02とSI-03はほぼ同時期と思われるが、古墳時代前期から中期という時間的な差が住居間においては見られる。その反面一つの住居においては住居を拡張したとか、遺物においても時間的な差は見られない。このことから、本遺跡の堅穴住居は古墳時代前期から中期にかけて継続して人々が移り変わって住んでいたと思われる。その中でSI-02・SI-03は他の堅穴住居跡と比べると規模が一回り大きく、SI-03については遺物の出土数も多い。このことは継続して生活を営んでいる間において、この時期に一つの繁栄があったと考えられないだろうか。次にSI-01・SI-03において高杯が多数出土しているということに注目したい。住居跡から高杯が出土することはとくに珍しいことではないが、他の土器類に比べ高杯の出土比率が高いことは注目される。本来一般的に祭祀的要素に使われることが多いとされている高杯が、これだけの数出土しているということで何か祭祀的意味をもつ住居ということも考えられる。しかしながら、SI-01では貼床の下から高杯を検出しておらず、SI-03でもピットの中から高杯を検出している。これらがどのような意味をもつか明確ではないが、祭祀的要素があると考えられるならば、ピット以外から検出された高杯は祭祀以外に利用されたものと考えられる。そして古墳時代前期後半から中期にかけて継続して高杯を多くもつ住居があるということで、生活道具として高杯を日常的に使用していたと考えられるのではないかだろうか。またSI-02・SI-04については遺物の出土数が少ないため断定はできないが、古墳時代前期後半の住居の規模が大きくなかった時期と高杯を多く使用するようになった時期との間に何等かの関係があるのかもしれない。

この他、遺構確認はされなかったが、中世の遺物が相当数検出されていることから、本調査地の周辺に中世の遺構があると考えられる。

今回の調査の結果、この地において弥生時代から中世にかけて継続して生活が営まれていたことがわかった。それと同時に、今回の調査が限られた範囲に止まっていることや、周辺地域における発掘調査がほとんど行われていないことも含めて、不明点や疑問点も残っている。いずれにしてもこの地域における調査はまだ始まったばかりである。今後どの程度の調査が行われるかは今のところ未知ではあるが、今回の調査での多くの疑問点や、この地域における古代の流れが今後の調査によって明らかになることに期待したい。

〈付 編〉放射性炭素年代測定について

古環境研究所

吉谷トコ遺跡から出土した試料について年代測定を行った。その結果を次表に示す。なお、年代値は1950年よりの年数(B.P.)である。

年代値の算出には¹⁴Cの半減期としてLIBBYの半減期5570年を使用している。また、付記した誤差は β 線の計数値の標準偏差 σ にもとづいて算出した年数で、標準偏差(ONE SIGMA)に相当する年代である。また、試料の β 線計数率と自然計数率の差が 2σ 以下のときは、 3σ に相当する年代を下限の年代値(B.P.)として表示してある。また、試料の β 線計数率と現在の標準炭素(MODERN STANDARD CARBON)についての計数率との差が 2σ 以下のときは、Modernと表示し、 \pm ¹⁴C%を付記してある。

表 吉谷トコ遺跡出土試料の放射性炭素年代測定結果

試料 No	出土地点	種類	年代値	コードNo
No.352	堅穴住居内床面	炭化物	2280±80(B.C.330)	GaK-17461
No.381	堅穴住居内柱穴	炭化物	2590±80(B.C.640)	GaK-17462
No.414	堅穴住居内	炭化物	1960±120(B.C. 10)	GaK-17463

遺物観察表 1

SI-01

種類	口径(cm)	残存器高(cm)	底径(cm)	焼成	色調	胎土	備考
1 高环	16.0	11.3	8.4	良	好 茶褐色	1~3mmの砂粒含む	70%残
2 高环环部	(16.8)	4.5		良	好 明茶褐色	1mmの砂粒含む	1/20死
3 高环环部	(7.8)	3.4		普	通 茶褐色	1mmの砂粒含む	1/12死
					強烈な鉄酸化		
4 高环环部	16.2	5.8		良	好 淡茶褐色	1mm(2~3mmの砂粒含む)	
5 高环环部	(15.6)	4.4		普	通 茶褐色	1mmの砂粒含む	10%残
6 高环环部	14.8	6.4		普	通 茶褐色	1~2mmの砂粒含む	
					表面すり付石		
7 高环环部	14.0	5.5		良	好 淡茶褐色	密(1~2mmの砂粒含む)	90%残
8 高环环部	(11.0)	3.7		普	通 明茶褐色	1mmの砂粒含む	10%残
9 高环环部		3.0	(14.8)	普	通 茶褐色	1~2mmの砂粒含む	1/12死
10 高环环部		2.2	(11.2)	普	通 淡茶褐色	1mmの砂粒含む	1/5死
11 高环环部		1.1	(10.3)	普	通 茶褐色	1mmの砂粒含む	1/8死
12 高环环部		2.0	(13.0)	普	通 明茶褐色	1mmの砂粒含む	1/16死
13 高环环部		5.7	10.6	良	好 淡茶褐色	1mmの砂粒含む	80%残
					やまとすり		
14 遺口縫	(18.0)	2.8		やや不良	茶褐色	極端に砂粒含む	
15 遺口縫	19.6	4.1		良	好 乳白色	1~2mmの砂粒含む	1/8死
16 遺口縫	16.0	5.7		良	好 茶褐色	1mmの砂粒含む	1/8死
17 遺口縫	17.0	3.9		良	好 淡茶褐色	1~2mmの砂粒含む	20%残
18 頸腹	15.0	5.7		良	好 茶灰褐色	1mmの砂粒含む	1/6死
19 頸	(25.2)	22.1		小	食	強烈な鉄酸化	1~3mmの砂粒含む
20 頸	16.3cm(共5)・1.6cm(縫)・0.55cm(厚み)						

SI-02

種類	口径(cm)	残存器高(cm)	底径(cm)	焼成	色調	胎土	備考
21 高环环部	(20.8)	2.9		普	通	強烈な鉄酸化	1~2mmの砂粒含む
22 遺口縫	(16.0)	3.9		良	好 茶褐色		1/16死
23 遺口縫	(8.0)	3.9		普	乳白色		1/8死
24 頸	(15.0)	1.4		良	好 茶褐色	1~2mmの砂粒含む	1/8死
25 頸	(14.0)	1.0		良	好 黄褐色	普通	1/8死
26 頸環部							

SI-03

種類	口径(cm)	残存器高(cm)	底径(cm)	焼成	色調	胎土	備考
27 高环	16.9	12.3	11.0	良	好 淡茶褐色	1~2mmの砂粒含む	
28 高环		11.8	12.0	普	通	強烈な鉄酸化	1mmの砂粒含む3透
29 高环环部	16.6	7.0		良	好 茶褐色	1~3mmの砂粒含む	70%強烈
30 高环环部	15.8	5.6		良	好 茶褐色	1~2mmの砂粒含む	
31 高环环部	(18.0)	6.2		良	好 茶褐色	1~2mmの砂粒含む	
32 高环环部	15.8	5.35		普	通 茶褐色	1~2mmの砂粒含む	
33 高环环部	15.6	6.1		良	好 茶褐色	1~2mmの砂粒含む	
34 高环环部	(16.0)	5.8		良	好 紅褐色	1~2mmの砂粒含む	1/4死
35 高环环部	17.0	4.1		良	好 黄茶褐色	1~2mmの砂粒含む	2/8死
36 高环环部	17.2	6.3		良	好 茶褐色	1~2mmの砂粒含む	
37 高环环部	14.8	7.0		普	通	強烈な鉄酸化	1~5mmの砂粒含む
38 高环环部	(12.0)	3.9		やや悪い	暗茶褐色	1~2mmの砂粒含む	1/8死
39 高环环部	2.4	10.0		良	好 紅褐色	1~3mmの砂粒含む	1/4死
40 高环环部	2.4	10.6		やや不良	淡褐色	普通(2~3mmの砂粒含む)	3方透 90%残
41 高环环部	5.4	10.0		やや悪い	淡褐色	やや暗3方透	90%死
42 高环环部	4.2	11.2		普	通	強烈な鉄酸化	3方透 3/4死
43 高环环部	7.2	13.6		普	通 淡褐色	1~2mmの砂粒含む	3方透
44 高环环部	5.6	11.0		良	好 茶褐色	普通(鐵酸化含む)3方透	90%残
45 高环环部	6.3	10.4		良	好 レンガ色	普通	90%残
46 高环环部	4.95	10.7		良	好 強烈な鉄酸化	1mmの砂粒含む	90%残
47 高环环部	2.95	11.0		良	好 紅褐色	普通	1/4死
48 高环环部	5.3	9.0		普	通	強烈な鉄酸化	1~2mmの砂粒含む
49 高环环部	5.45	11.2		良	小 茶褐色	1~3mmの砂粒含む	2/4死

遺物観察表2

種類	口径(cm)	残存器高(cm)	底径(cm)	焼成	色	調査	土	備考
50 魚口縫	(14.0)	3.5	-	普通	褐色	細粒の砂粒多く含む	-	-
51 魚口縫	(13.8)	2.3	-	普通	褐色	0.5~1mmの白砂粒少量含む	-	-
52 魚口縫	(16.0)	3.2	-	やや小良	茶褐色	-	-	-
53 魚口縫	(16.0)	5.6	-	不	淡黃褐色	1mmの白砂粒含む	-	口縫1/5死
54 魚口縫	(16.0)	3.0	-	小良	淡黃褐色	細粒の白砂粒多く含む	-	-
55 魚口縫	(18.0)	4.2	-	普通	淡褐色	密	-	1/10死
56 魚口縫	(14.0)	4.1	-	良好	灰黑色	密	-	1/4死
57 魚口縫	(16.0)	5.0	-	不良	淡褐色	密	-	口縫1/2死
58 魚口縫	(18.0)	5.1	-	普通	淡褐色	密	-	-
59 魚口縫	(14.6)	6.3	-	良好	灰黑色	密 (0.5~2mmの白砂粒含む)	-	-
60 魚口縫	(18.0)	4.6	-	普通	淡褐色	1mmの砂粒少量含む	-	-
61 魚口縫	-	2.7	-	普通	褐色	密	-	-
62 魚口縫	(14.0)	5.5	-	良好	灰黑色	密 (細粒の砂粒含む)	-	1/5死
63 魚口縫	(16.0)	3.2	-	良好	淡赤褐色	密	-	1/8死
64 底窓部	(14.0)	4.8	-	良好	淡黃褐色	密	-	底部1/3死
65 魚口縫	15.0	6.9	-	良好	灰褐色	1~2mmの砂粒含む	-	85%死
66 魚口縫	18.6	9.5	-	良好	淡褐色	密	-	1/6死
67 魚口縫	17.0	5.9	-	良好	灰黑色	密	-	-
68 尾翼部	-	7.7	-	普通	淡黃褐色	1~2mmの白砂粒含む	頭部/3死	-
69 魚口縫	(15.0)	8.5	-	普通	淡褐色	密 (1~2mmの砂粒含む)	1/2死	-
70 魚口縫	(18.8)	4.1	-	普通	淡褐色	密	-	-
71 魚口縫	20.0	7.0	-	やや不良	淡黃褐色	密	-	1/8死
72 魚口縫	(23.6)	4.5	-	普通	淡黃褐色	密 (1~3mmの砂粒含む)	1/8死	-
73 長頭身	13.2	9.2	-	やや不良	淡赤褐色	密	-	頭部2/3死
74 長頭身	14.8	14.6	-	良好	淡褐色	1~2mmの白砂粒含む	尾部少死	-
75 長頭身	9.6	12.8	-	良好	赤茶色	密	-	1/4死底部少死
76 長頭身側部	(10.0)	5.8	-	良好	赤茶色	密	-	1/5死
77 小型丸底壺	11.0	6.8	-	普通	淡赤茶色	密	-	-
78 小型丸底壺	8.2	6.2	-	普通	褐色	1~2mmの白砂粒少量含む	-	-
79 小型丸底壺	(8.0)	6.8	-	良好	褐色	1~2mmの白砂粒少量含む	1/8死	-
80 弁生底部	-	1.5	(8.0)	不良	淡褐色	密	-	1/4死

SI-04

種類	口径(cm)	残存器高(cm)	底径(cm)	焼成	色	調査	土	備考
81 魚口縫	(16.8)	25.0	-	普通	黒褐色	密 (1mmの少しき砂粒含む)	-	1/7死
82 魚口縫	16.6	19.0	-	良好	緑褐色	1~2mmの砂粒をやや多く含む	-	1/2死
83 魚口縫	(14.2)	3.6	-	良好	乳白色褐色	1~2mmの砂粒含む	-	1/8死
84 魚口縫	(20.0)	4.9	-	普通	褐色	1mmの白砂粒含む	-	-
85 魚口縫	(17.2)	3.6	-	良好	黒褐色	1~2mmの砂粒含む	-	1/8死
86 口	-	5.7	-	小良	淡褐色	1~5mmの白砂粒含む	頭部	-
87 弓矢口縫	26.0	5.8	-	普通	褐色	1~2mmの砂粒含む	-	-
88 弓矢口縫	22.0	6.5	-	普通	白色	1~3mmの砂粒含む	-	-
89 置台	(12.0)	2.2	-	やや粗	褐色	密 (1~2mmの砂粒含む)	-	1/8死
90 置台底部	-	2.1	(7.0)	普通	褐色	密	-	1/4死
91 置台底部	(18.0)	3.1	-	やや粗	褐色	密 (1~2mmの砂粒含む)	-	1/8死

SB-01

種類	口径(cm)	残存器高(cm)	底径(cm)	焼成	色	調査	土	備考
92 瓢	(21.8)	1.2	-	良好	青褐色	青褐色を多少含む	-	1/8死
93 瓢	-	1.35	-	墨	青褐色	1~2mmの砂粒含む	-	1/4死
94 高台底	(19.8)	(2.3)	1.9	普通	青褐色	青褐色を多少含む	-	50%死
95 高台	-	1.3	11.2	普通	明茶褐色	1mmの砂粒含む	-	40%死
96	-	12.0	3.0	普通	内面明茶褐色	1mmの砂粒含む	-	70%死
97 弁生十器	-	4.9	5.6	やや墨	青褐色	青褐色を多少含む	-	1/10死

遺物觀察表3

SD-01

種類	口径(cm)	残存器高cm	底径(cm)	焼成色	調査	土	備考
再生土	(14.6)	4.5		普通 黒灰褐色	0.5~2mmの砂粒多く含む	1/8枚	
环口罐	(11.6)	2.4		良 好	黒褐色		
环口罐	(15.0)	1.4		良 好	灰褐色	1mmの砂粒含む	
凸台		2.3	(8.2)	普通	灰褐色	1mmの砂粒含む	1/2枚
凸台		1.4	(7.8)	良 好	淡灰褐色	密	1/5枚
凸台		1.9	(12.2)	良 好	灰褐色	密	1/8枚
凸台		1.3	8.6	良 好	暗灰褐色	密	1/2枚

SK

種類	口径(cm)	残存器高cm	底径(cm)	焼成色	調査	土	備考
高环坏部	17.0	5.6		良 好	灰褐色	1~2mmの砂粒含む	SK-06
高环坏部		7.1	11.0	良 好	淡褐色	(1~2mmの砂粒含む)	3方透1/4枚 SK-06
LJ罐	(14.0)	3.7		良 好	黑褐色	密	SK-06
直LJ罐	(19.0)	9.5		不 良	茶褐色	1~2mmの砂粒多く含む	SK-08
再生土	16.5	29.7	8.8	普通	内面黒褐色	2~3mmの砂粒含む	SK-08
底板		3.9	10.0	やや悪い	灰褐色	1~5mmの砂粒含む	SK-19

周辺

種類	口径(cm)	残存器高cm	底径(cm)	焼成色	調査	土	備考
高环坏部	(20.0)	3.85		普通	黄褐色	密(1~2mmの砂粒含む)	1/8枚
高环坏部	19.0	4.7		普通	赤褐色	2~4mmの砂粒含む	6/8枚
土	(17.4)	4.5		良 好	茶褐色	密	1/8枚
土	(16.0)	4.5		不 良	茶褐色	1~2mmの砂粒含む	
土	(16.0)	6.8		良 好	淡黄土色	密(1~2mmの砂粒含む)	2/5枚
再生土坏	(14.6)	4.5		普通	黑褐色	0.5~2mmの砂粒含む	1/8枚
土	(16.0)	1.5		良 好	红褐色	密	1/8枚
土	(16.8)	1.6		普通	明茶褐色	1~2mmの砂粒含む	1/12枚
土	(16.8)	2.0		良 好	黄褐色	1mmの砂粒含む	1/12枚
土	(18.0)	1.55		良 好	黄褐色	普通	1/8枚
土	(14.0)	1.3		良 好	红褐色	密	1/8枚
土	(11.0)	1.3		良 好	红褐色	密	1/8枚
土	(10.0)	2.9		やや悪い	红褐色	普通	1/8枚
土	(13.0)	3.4		良 好	黄褐色	普通	3/4枚
高 台		2.8	(7.4)	普通	茶褐色	1mmの砂粒含む	
高 台		1.9	(8.4)	普通	茶褐色	0.5~1mmの砂粒含む	
高 台		1.8	(7.2)	普通	淡茶褐色	1~2mmの砂粒含む	1/3枚
高 台		1.65	(8.3)	良 好	灰褐色	1mmの砂粒含む	
高 台		2.2	7.0	良 好	黄褐色	密	
高 台		1.6	(12.8)	普通	茶褐色	1mmの砂粒含む	1/6枚
土	(12.0)	3.0	8.0	良 好	茶褐色	普通	

トレンチ

種類	口径(cm)	残存器高cm	底径(cm)	焼成色	調査	土	備考
土	(16.0)	2.9		やや悪い	淡茶褐色	密(1~2mmの砂粒含む)	
土	(7.0)	3.2		普通	茶褐色	1~2mmの砂粒含む	1/8枚
再生底部		3.0	8.0	良 好	茶褐色	密(1~2mmの砂粒含む)	1/4枚
再生土	(9.0)	2.3		良 好	茶褐色	密(1~2mmの砂粒含む)	1/8枚
古土罐	28.0	5.6		普通	茶褐色	密(1~2mmの砂粒含む)	1/4枚

図 版



調査前状況

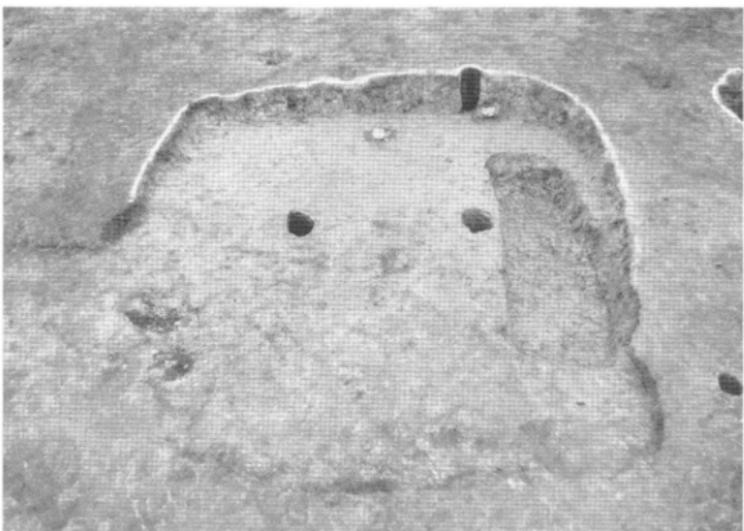


調査地全景

図版2

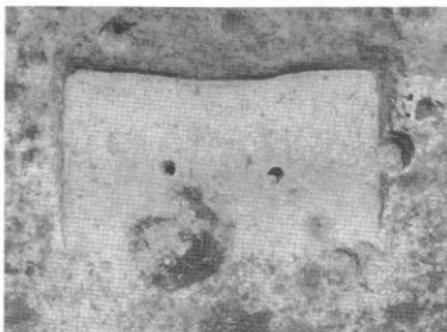


SI-01 遺物出土状況



SI-01 全景

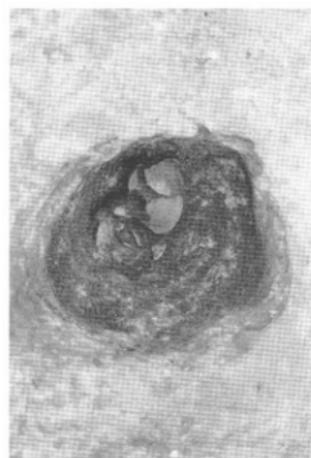
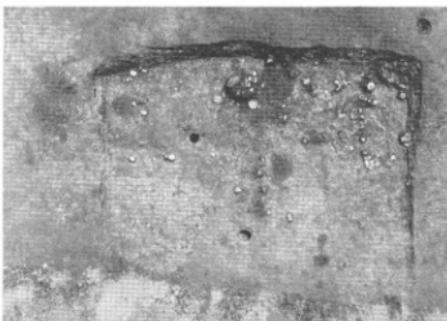
图版 3



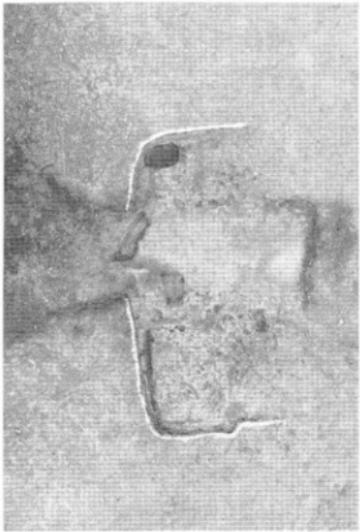
左上：SI-02全景
左中：SI-03遺物出土状况

右上：SI-03
pit2内遺物
出土状况

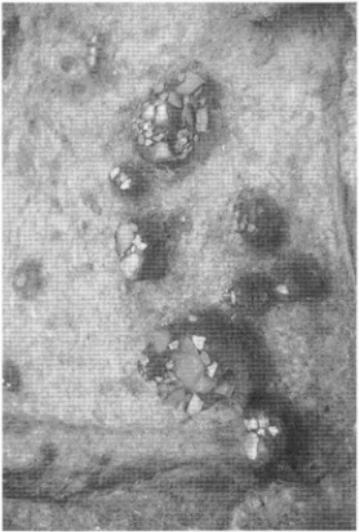
下：SI-03全景



図版 4



SI-04 全景



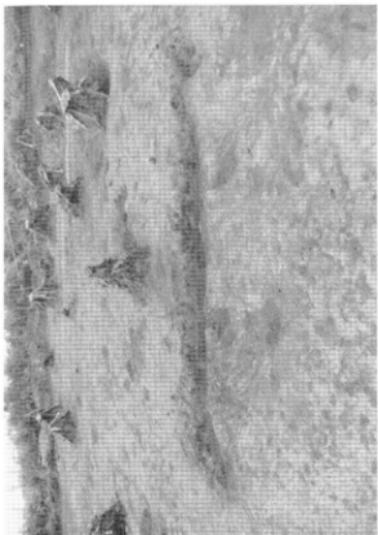
SI-04 遺物出土状況



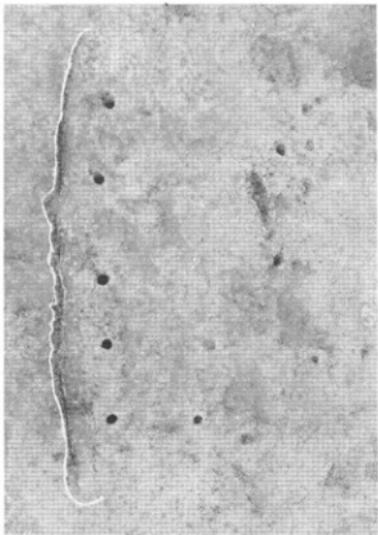
SI-04 遺物出土状況



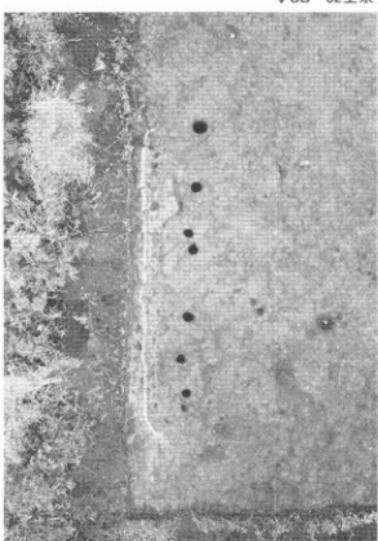
SI-04 遺物出土状況



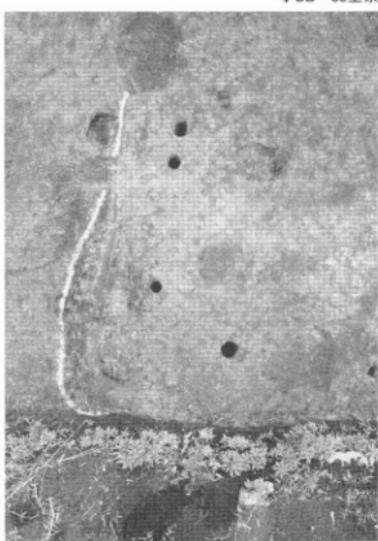
↑ SD-01全景



↑ SB-01全景

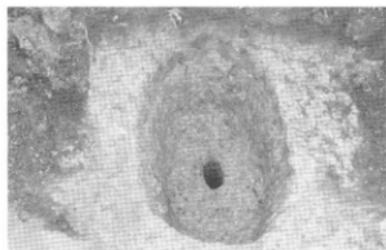


↓ SB-02全景

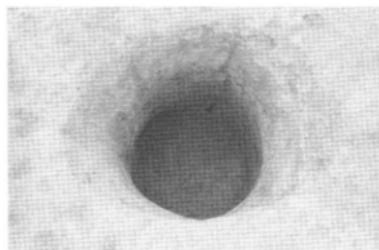


↓ SB-03全景

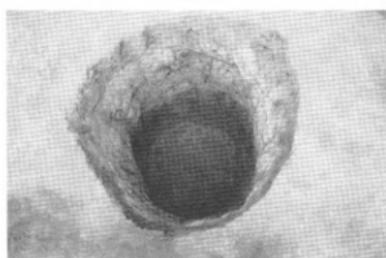
図版6



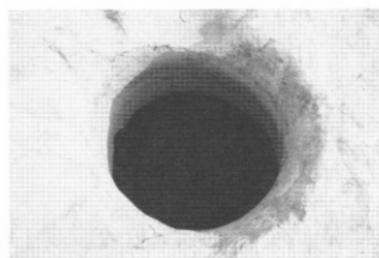
SK-01



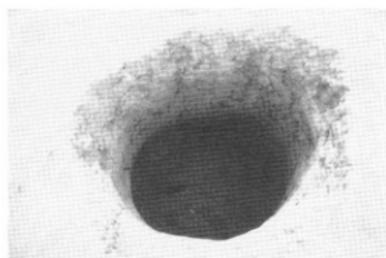
SK-10



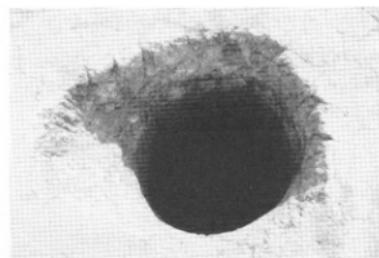
SK-12



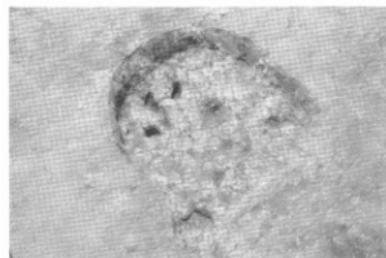
SK-13



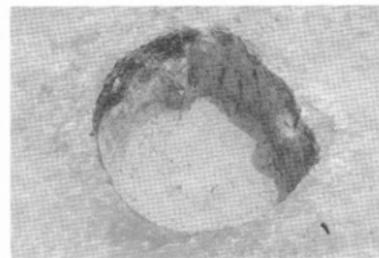
SK-14



SK-15



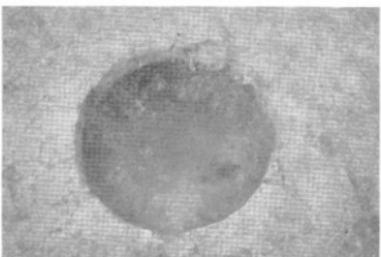
SK-05



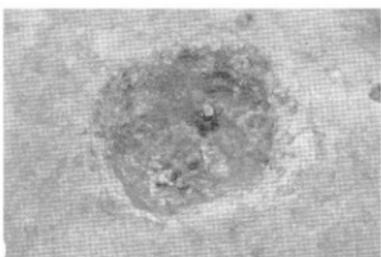
SK-03



SK-08 遺物出土状況



SK-08 完掘状況



SK-11



SK-17



SK-18



SK-19

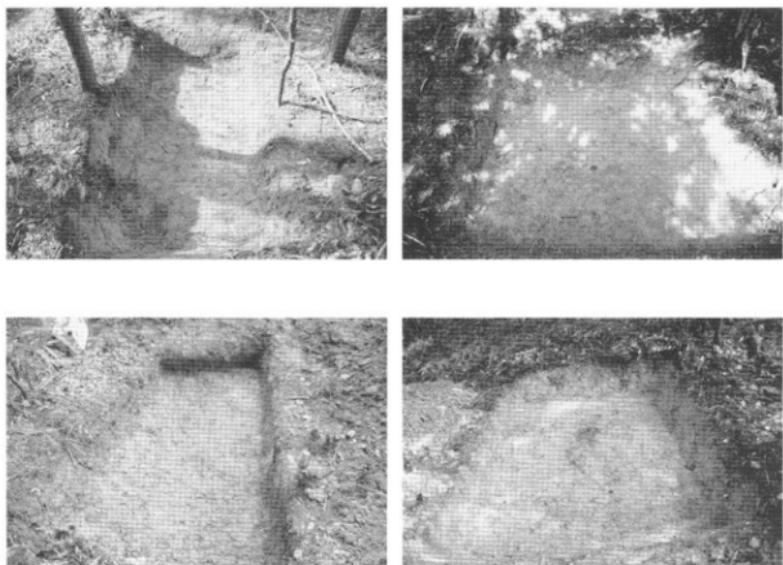


SK-04



SK-06

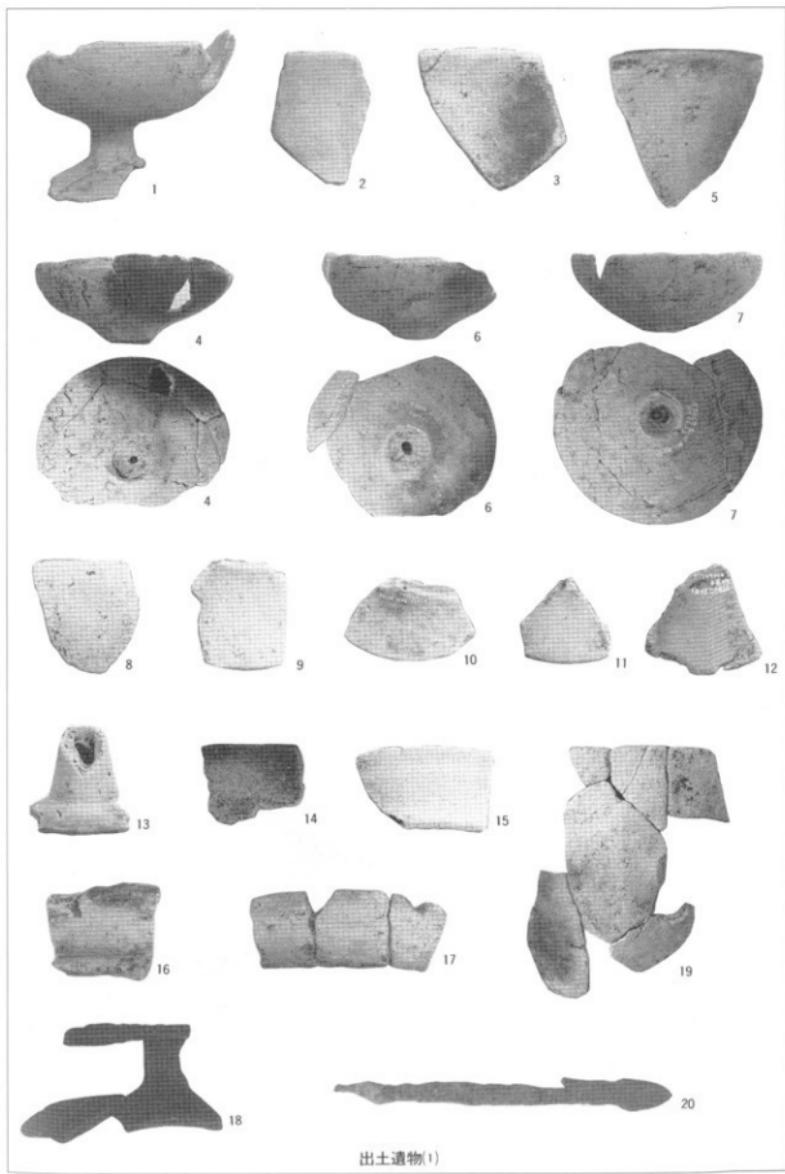
図版 8



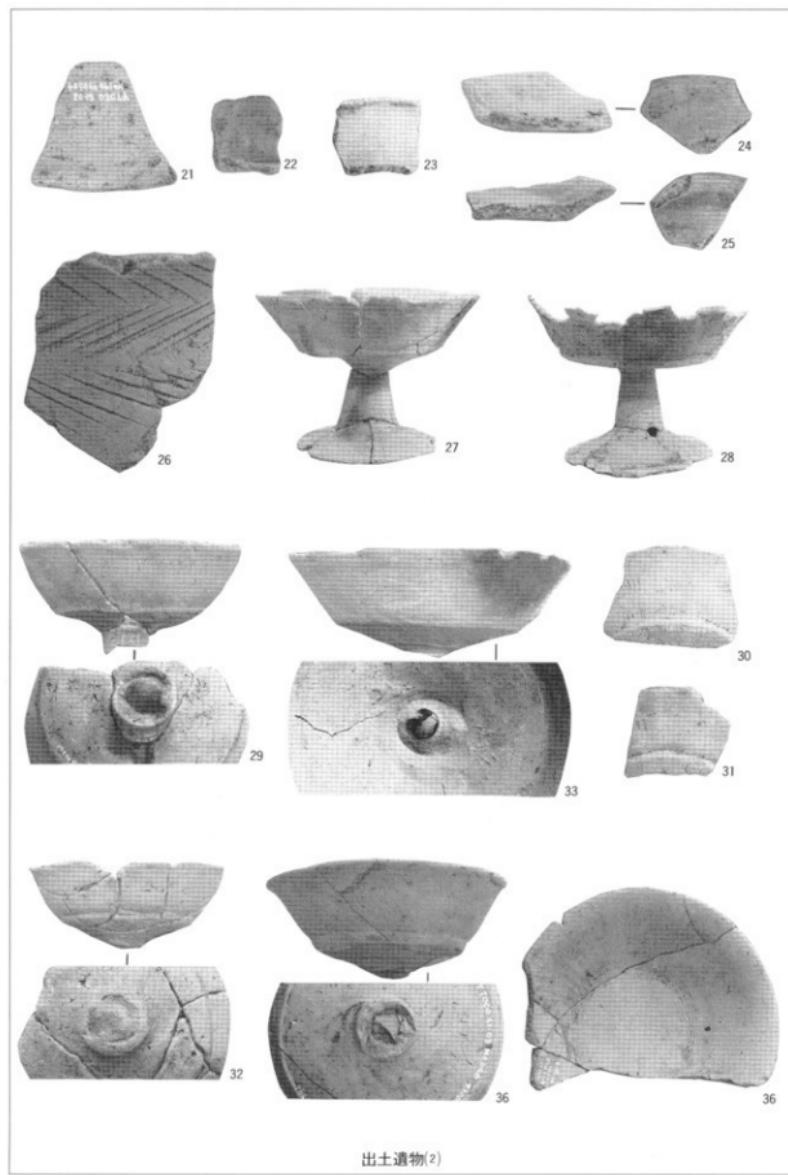
鉄塔部調査状況



調査終了後状況



図版10

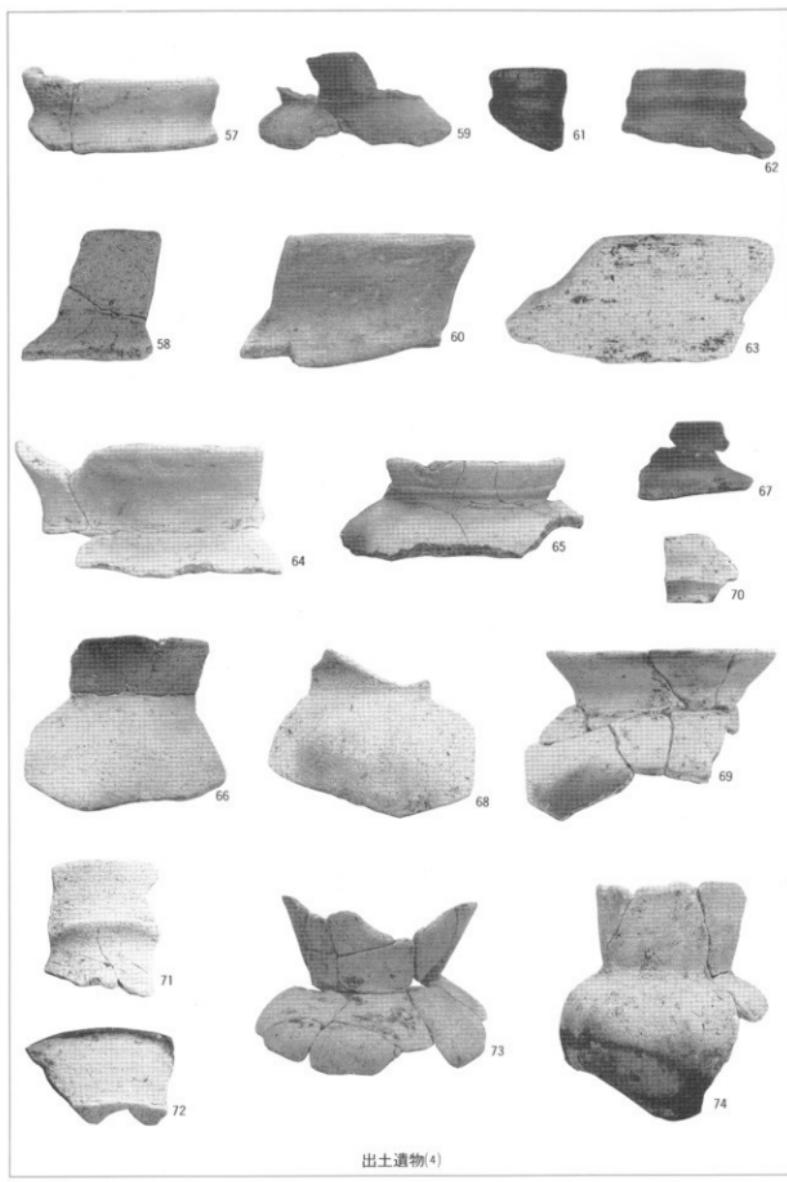


出土遺物(2)

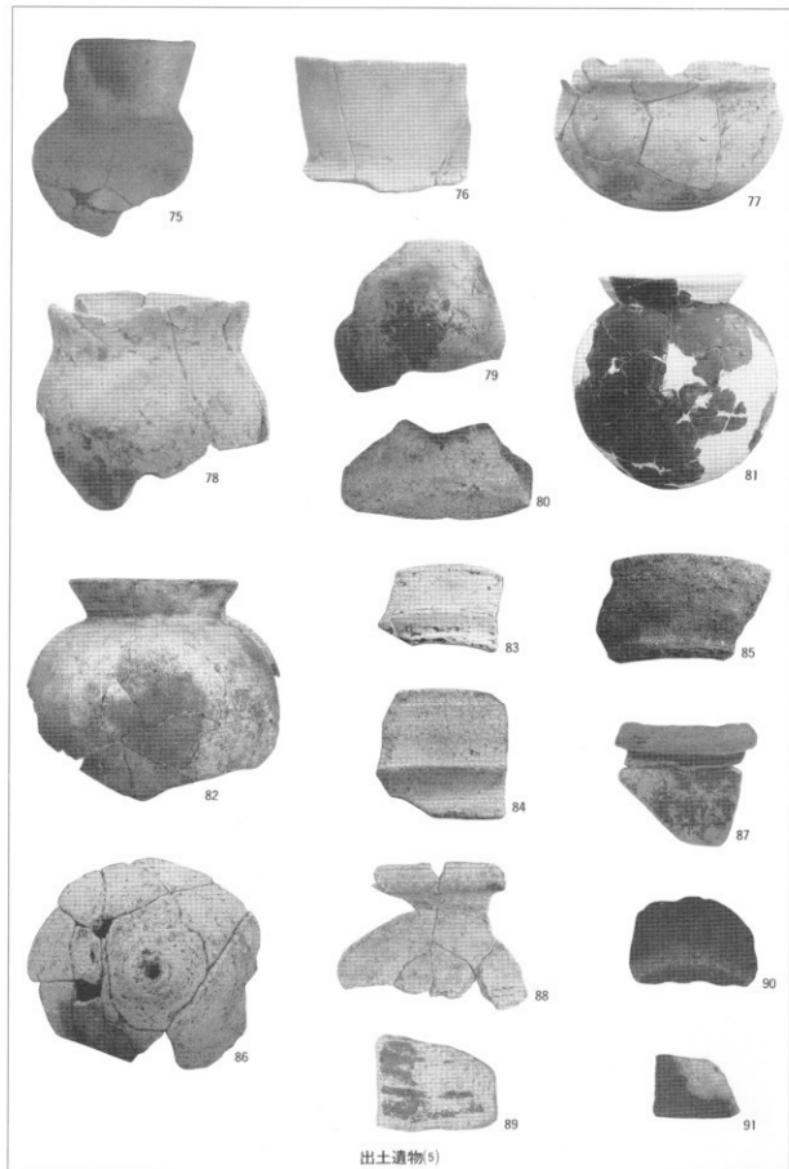


出土遗物(3)

図版12

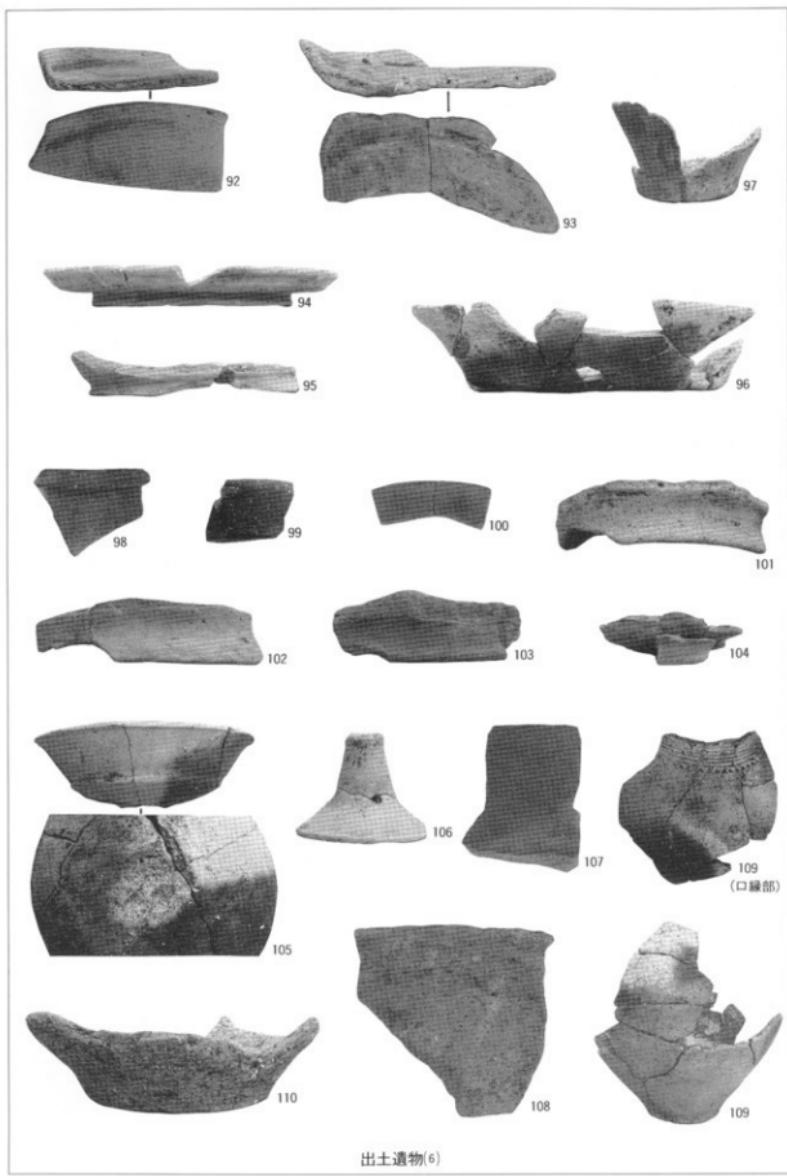


出土遺物(4)

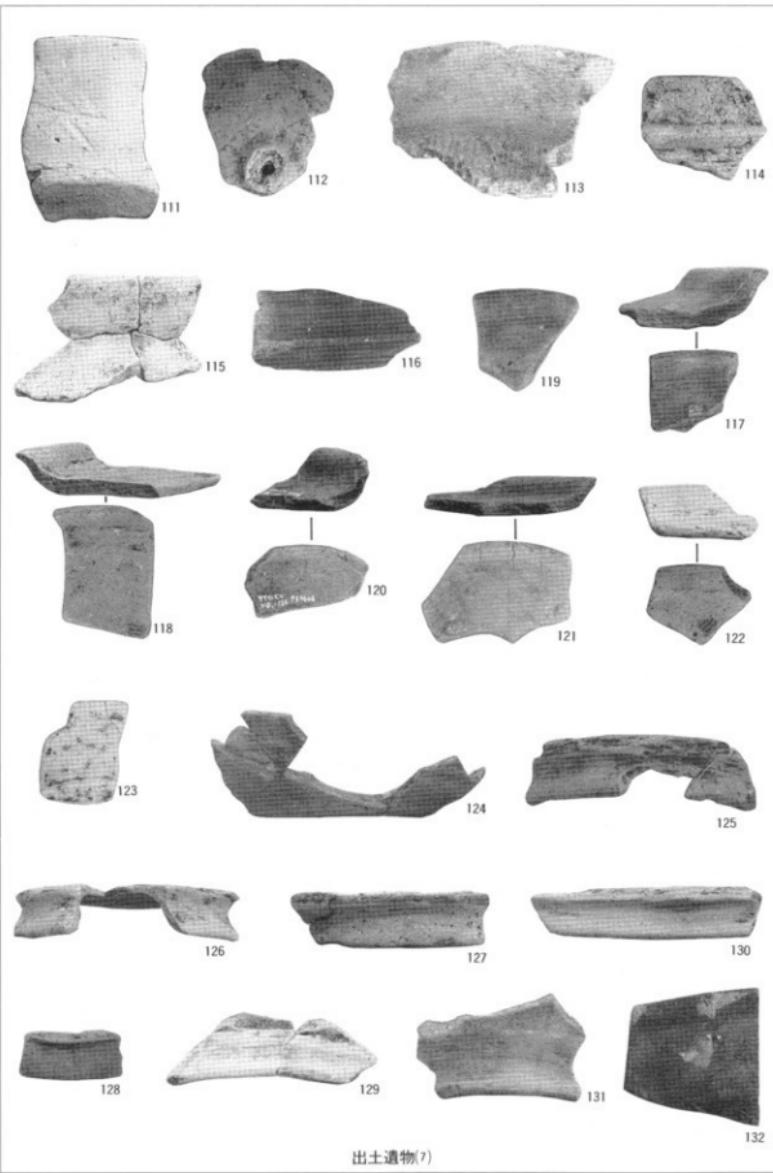


出土遗物(5)

図版14



出土遺物(6)



図版16

